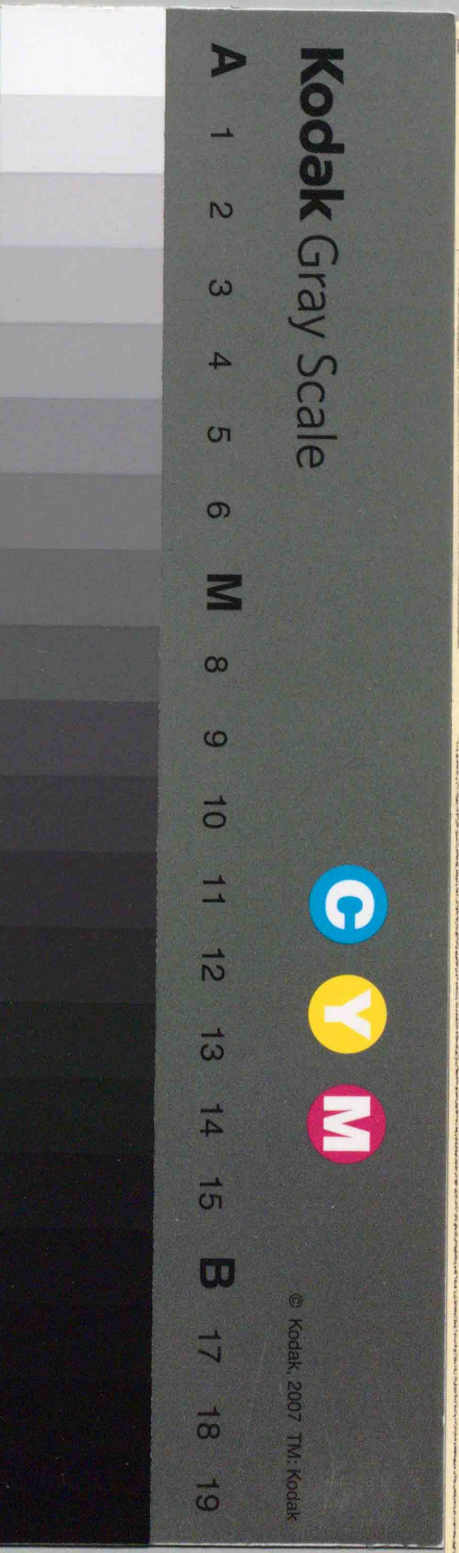
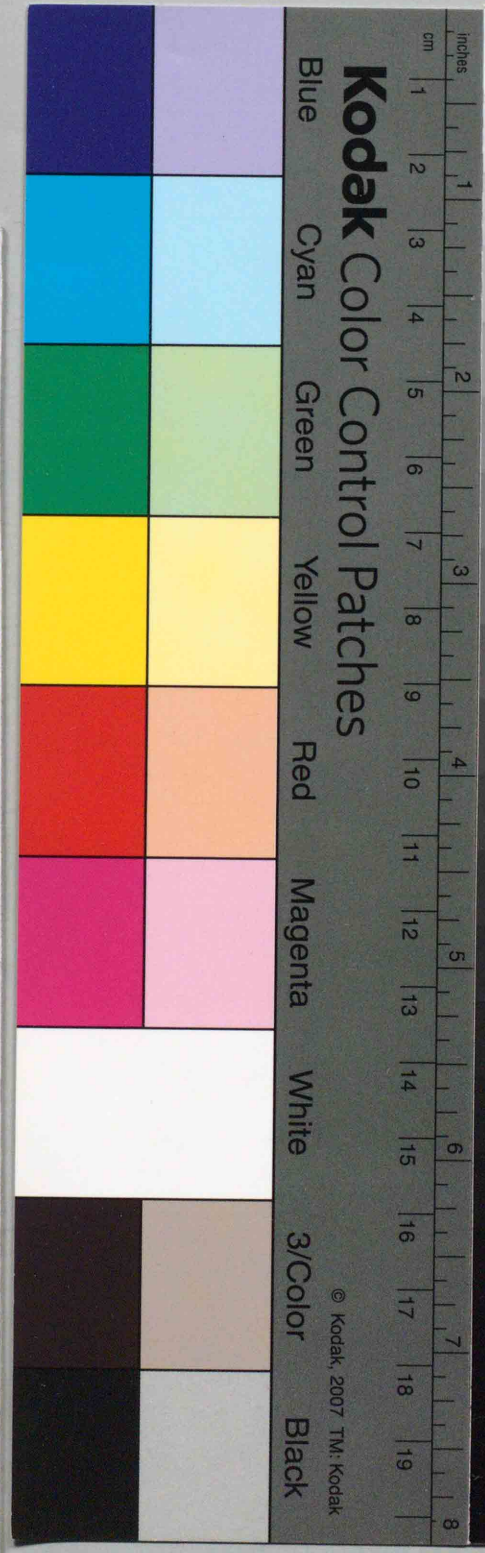


訂新
新撰國語讀本
卷三

3759
Sa19
資料室



41526

教科書文庫

4
810
41-1925
200030
1480

719



2759
Sats

百
隨
在

真
美

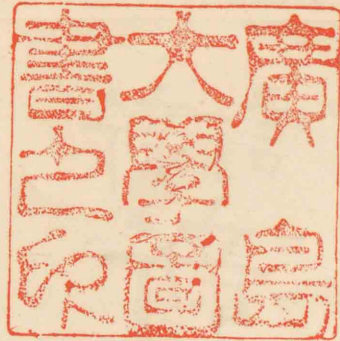
日二十二月一年四十大
濟定檢省部文
用科語國校學中

新新撰國語讀本

文學博士佐多編

大町芳衛
武島又次郎
杉敏介
補修

株式會社
明治書院



訂新
新撰國語讀本卷三目次

一	君が代の歌	芳賀矢一	一
二	短歌評釋	若山牧水	四
三	雀の聲(短歌)	石川啄木	八
四	春の一日	島崎藤村	一〇
五	繪端書帖		一四
六	天幕生活を思ふ	若山牧水	一九
七	眞田大助	柴野栗山	二七
八	形	菊池寛	三三
九	桶峽(詩)	中村秋香	三六
一〇	拙速	井上哲次郎	四二

一一 豊太閤の逸話……………福本日南…一五

一二 倫敦の霧……………夏目漱石…一五〇

一三 或日の馬琴上……………芥川龍之介…一五六

一四 或日の馬琴下…………………………一六三

一五 感 謝(詩)……………野口米次郎…一六六

一六 夕立雲……………徳富蘆花…一七〇

一七 金華山……………長 塚 節…一七五

一八 トラファルガルの海戦上……………小笠原長生…一八四

一九 トラファルガルの海戦下…………………………一九〇

二〇 森の繪……………吉村冬彦…一九五

二一 繪畫の感化……………那珂通高…二〇三

二二 桔梗ヶ原上……………吉江孤雁…二一〇

二三 桔梗ヶ原下…………………………二一五

二四 讀 書……………坪内逍遙…二二二

二五 競争と科學上……………丘 淺次郎…二二六

二六 競争と科學下…………………………二三三

二七 高田屋嘉兵衛……………(近世人傑傳)…二三九

二八 佛濱の月夜……………大町桂月…二四六

二九 高瀬舟上……………森 鷗外…二五〇

三〇 高瀬舟下…………………………二五九

新撰國語讀本卷三

一 君が代の歌

日本の國歌は三十一文字の短歌「君が代」である。これほど短い國歌は何處の國にも無い。形の短いばかりでなく、君が代の長久といふ御祝詞を述べただけで、その内容も誠に單純である。併し、この短簡、この單純が、諸外國とは全く異なつてゐる。我が國體と國民性を、十分に説明してゐるのである。



日本國の皇室は開闢以來の皇室である。此の日本の國土は、我が皇室の君臨キョウリンまします所トコロと神代の昔から定まつてあつて、皇室と國土とは決して離れないのである。外國の皇室にはさういふ例は一つもない。もと普通の人民の中から、或は德望(人望)により、或は權力により、次第に成上つて王となり帝となつたのであるから、歴史よりは皆ずつと新しい皇室である。國土は其のまま、皇室は幾度も變つたのである。それ故、人民の考にも、國土と皇室とを一つにして考へる事は出來ない。皇室即ち國家とは考へないのである。

かういふ譯ゆゑ、外國の國歌では、どうしても國土や國家の事を歌はなければ満足が出來ない。皇室の御繁榮を歌つ

ただけでは物足りないのである。日本では、皇室の御繁榮は即ち國家の繁榮であるから、皇室の御繁榮を歌ふだけで十分である。短い「君が代」の歌は、皇室の御繁榮を歌ふと同時に、國家の繁榮をも含んでゐるのは勿論である。

「君が代」の歌にあらはれた思想、天皇の御代の長久を祈るといふことは、日本の上代から種種の文學にも現れて居り、祭禮や風俗に混つて居ること、事新しくいふまでもない。皇室の方でも人民を御慈しみになつて、皇室と人民との間に争の起つたといふ事は昔から絶えて無い。皇室の御繁榮は即ち人民の繁榮、幸福であるといふことが、日本人の信念である。それ故、別段に人民の繁榮や幸福を歌ふ必要はない。

短い「君が代」の歌には、國家の繁榮と共に、人民の繁榮幸福も自ら含まれて歌はれて居るのである。(芳賀矢二)

二 短歌評釋

専ら初步の短歌愛好者のために、少しく現代の短歌の評釋を試みようと思ふ。一には廣く短歌を知らしめんため、又一には之を詠む人の参考にも供したいと思ふのである。

石崖に子ども七人腰かけて河豚を釣り居り夕焼小

焼

北原白秋

「夕焼小焼」とは、子供たちが夕焼の時によく唄ふ歌である。それをそのまま採つたのであるが、如何にもよく調和して、

故意に作りなされた跡を見ない。加之、これあるがために、夕焼小焼の海邊の石崖に、多くの子供が一心に釣りいつてゐる光景が、實に鮮明に、而もうるほひゆたかに歌ひ出されてある。

青き實の蔭に椅子よせ春の日を友と惜しめば薄雲のゆく
北原白秋

木立の深い庭園に、青い果實をつけた一もとの樹がある。その下蔭に椅子をよせて、親しい友とともに、言葉も少なくて、暮れゆく春の日を惜しみ合うて居ると、僅な木の間を透いて薄い雲が流れ流れてゆく。

新しきからだを欲しとおもひけり手術の創の痕を

撫てつつ

石川啄木

*石川啄木は明治四十五年四月、年二十七にて逝く。

彼の晩年に腹膜炎で切開手術を受けた後の作である。まことに何氣ない風に歌つてある。到頭自分の身體には大きな創が出来てゐる。ああ創のない立派な新しい身體が欲しいものだと言ふのである。表面は唯それだけである。併しこの作者の作だけに、種種な事を思はせられる。自分の心は過去の種種な苦しい境遇にさいなまれて、大變に濁つてゐる。それに今又身體までこんな創を受けて了つた。自分の前途は果してどうなるのか。といふ遣瀨ない苦悶の情がその底を流れてゐる。一度ついた創は死に至るまで消えはしない。勿論、その創がどんなに大きく深いものであつても、自分等

は飽くまでそれを征服して生きて行かねばならぬので、徒にその創を苦にして居るべきではないが、併し人間の運命不幸などに思ひ至れば、我等はこの歌を漫然と讀過することとは出来ない。

稀にある此のたひらなる心には時計の鳴るもおも

しろく聽く 石川啄木

自分としては極めて稀なこの平靜な心には、聞馴れてゐる時計の音までが、如何にも興味深く聽きなされるといふのである。深い大洋の底に、靜に一尾の魚が尾鰭を收めてぢつとしてゐるかのやうな、靜な懐しい印象を受ける。かうした場合にあつた作者を想像することによつて、我等はおの

づと我みづからを懐しむ心の湧いて來るのを覺える。

(若山牧水—和歌講話)

三 雀の聲

○ ふと思ふ故郷にゐて日ごと聞きし雀の鳴くを三とせ
聞かざり

○ わかれ居れば妹いとしも赤き緒の下駄など欲しとわ
めく子なりし

○ 飴賣のちやるめら聞けば失ひし幼きこころ拾へるご
とし

○ 汽車の窓はるかに北に故郷の山みえ來れば襟を正す

も

○ 雨ふればわが家の人たれもたれも沈める顔す雨はれ
よかし

○ 何となく今年は善いことあるごとし元日の朝晴れて
風なし

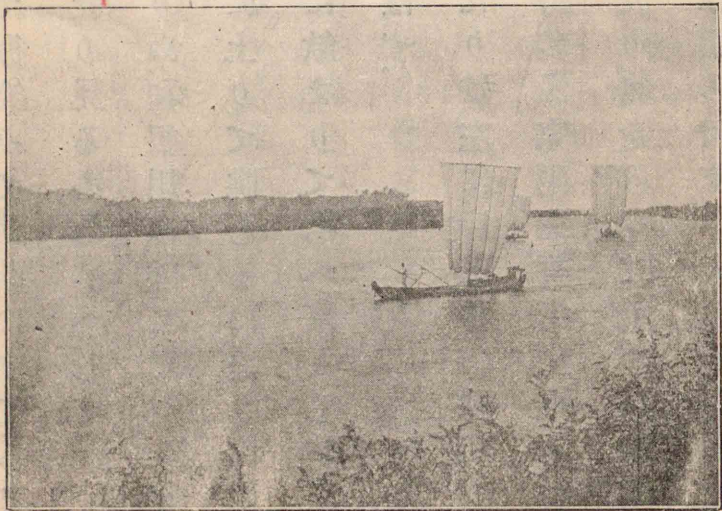
(石川啄木—啄木歌集)

四 春の一日

今年の春は雨多く、ともすれば空曇りて、快晴といふべき日は少かりしを、めづらしくも今日は雲收まりて、空の色も眼に心地よし。かくて興も湧きあがり、足も浮きたちければ、友を誘ひて利根川のほとりに遊ぶ。

見るたび毎に新しきは、朽ちず盡きざる自然のさまなりけり。殊に雨收まりての後なれば、樹といふ樹、草といふ草、げにいづれも緑うるはしき若葉を伸べて、活き活きと大氣を呼吸するさま、目に見ゆる心地す。はなやかに射す日の光の美はしさよ。柔かに吹渡る春の風の爽かさよ。我は酔ひしれ

たるが如く、恍惚として此の景色の中を行くに、松おひ茂れる小高き岡あり。友は此處に遊ぶことを好みて、常に來りて幽懷を遣るとかや。右に左に眺め入るに、松が根に咲出でたる一もとの花あり。蘭かと思へば蘭にはあらで、蕙の花なりけり。さるにても、その花の形の畫きたらんが如く、塵も据ゑざる風情の貴さよ。とて、友は花を愛づるの情に堪へてや、摘取りて黒き



帽子に挿みぬ。その花をかざして、微笑みて松蔭に立てる姿は、古の物語中の人物を目のあたり見る心地さへして。

我等は打伴れてこの岡を下りぬ。利根川の畔に出づれば、楊柳の花咲きみちたり。高き岸に上りて眺むるに、遠き山山、近き村村、いづれも一眸のうち、に歛まりて、携へ來りし雙眼鏡に入る桃の花の景色、えも言はず。

小貝川流れて利根に入るあたりは、左に戸田井の柳萌出てたるが見渡され、右には羽根野の漁家兩三軒岸に臨みて、物洗ふ女のさまも情趣を添へたり。舟を浮べて鯿か釣らんと綸を垂れたるさま、籠を背負ひ禱の目立ちたるを懸けたるが椿の花蔭を唄ひ行くさま、煙草を吹かす農夫の心安きを

常陸・下總の國境を流るる川。共に下總國北相馬郡にあり。

さま、柳に繋がれたる馬の嘶くさまなど、げに、車東西に馳せちがひ、煤煙暗く空を覆へる都の空と事かはり、かかる田舎ならでは見らるまじき景色なり。我は友と共に此方の岸をさまよひ、彼方の堤をつたひて、日一日、川のほとりに眺め暮しぬ。

馬を牽き鋤を肩にして歸る農夫の後につきそひ、眺め飽かぬ川の畔をさまよひ歸るに、俄に鳴きいだしたる蛙の聲に誘はれて、友の指さす方を眺むれば、彼方に立てる野の家あり。藁葺の屋根は春の星を帯びて、寂しき中にも深き趣を具へたるは、そも奈何なる人の住めるにかあらん。（島崎藤村）

イノコイケルノ子イノコイケルノ子イノコイケルノ子

五 繪端書帖

麗かなる春の日は隣の屋根に傾きたれど、なほ前栽の緑を洩れて、楓の影の障子に映れるもをかし。折しも訪れたりし友は歸り去りぬ。縁側にうづくまりゐて、繰りひろげたるは我が繪端書帖なり。

あるが中に、一時かしましく持てはやされし戦役記念端書も一ひら二ひらはあれど、五彩の色鮮かに、金銀の眩きものなどは、いといと稀にして、世の繪端書好きといふ人人の帖などに比ふべき榮もなければ、我にはとりどりに思ひ出おほく、棄て難き限を集めたるなり。
草花の美しきは姉上ぞ贈り給ひし。

今も花は好き給へりや。一莖の草花にも人の工のえ企つまじき美しさぞこまれる。良からぬ小説などを讀み給ひそ。勉強に倦み給はん折は、花こそよなき慰めなれ。この夏休も花圃の世話に暮し給へ。姉より。
二人して培へりし花圃は今も草花の盛りなり。姉上ぞ、げに花の美しさにおほし立てられ給ひけん。美しうなごやかに、對ひまゐらすれば、自ら春風に坐すといひけん。心地のみこそせられしか。今も南洋に、奇しく愛てたき花の數數つどへてやおはすらん。
並べて挿みたるは姉君の夫の君がすさびなり。うひうひしけれど、手づから描き給へる畫なるが面白し。大波の寄せ

ては返す巖頭に立ちて、意氣昂然たるは自らの姿なるべし。
萬事御放念被下度候。昨今の境遇如此に候。

いまだ姉上は彼の地に渡り給はざりし頃のなり。かかる
意氣にてこそ、今日の地位をも財産をも得給ひつれ。されば
此の二ひらは我が訓戒として、終生の同伴友にせんとは思ふ
なり。

打渡す海の彼方に富士がね聳えて、此方なるは三保の松
原なるべし。親しき友の、病をかの地に養ひたるがおこせし
なり。

日に日に快く候。この好風景、如何なる薬餌くすりも及ぶま
じき心地いたし候。

とあるは、こぞの秋なりけり。その程より漸う快くて、近きあ
たりの散歩など許されつ。月に二三度は必ず繪端書の音信
ありしが、今年の春の初なりき、白砂青松しらすながけるなつかし
き水彩畫に、

春立ちて歩いて見ればなほ寒き

と發句めきたるもの書きておこせしは、いやはてのなりけ
るよ。春寒の氣候に風邪を得て、俄に病重くなりて、筆とるこ
とさへ禁ぜられたりと聞くに驚きて、例の好める繪端書な
ど買ひととのへつつ、來ん日曜こそ訪はめと期したる程を
も待たで、永き別れとなりにしなり。あはれ、この幾ひらこそ
またも得難き形見なれや。

叔父君の獨逸より贈り給ひしは美しさ類ふべくもあらず。某が高名の聖母の像を摹したるものとぞ。氣高くして懐しく、威ありて猛からぬは、人間のものにあらじと見ゆ。

君が亡き母上に、眉のあたりは似たらずや。すする故郷なつかしき夕に認む。

とあり、かの鬚黒き叔父上にも、かかるやさしき方の御心地はおはしけるよ。」と父上ぞ宣はせし。

父上は繪端書は好み給はず、餘りに人人の持てはやすを益なき事に思ひ給へり。ざるを、一とせ、人人と吉野に花見に行き給ひて、かしこの花の寫眞版に、

まこととは誰かおもはんひとり見て吉野の山の春

(三) 誠とは誰か思はん
ひとり見て後に
今宵の月を語らば
(僧西行)

を語らば

西行庵のほとりにて、西行の口眞似致候、眞の歌は成り難く候。

とあるぞ唯一ひらあるなる。

一つ一つ見もて行く程に、その月その折など思ひ出でては、やがておもひはあらぬ方にのみ辿られて、繪端書帖も暫し忘れ果てつ、夕食召せ。」と呼ぶ聲に、ふとぞ驚きぬる。

六 天幕生活を思ふ

伊豆の國の天城山の頂上に近い處に、青篠の池とも八丁池とも呼ばれて、噴火口の跡だといふ小さな池がある。水は

(三) 佐藤義清。平安朝末期より鎌倉時代の初期に互りて著名なる歌僧。

よく澄んで、さほど深くはなく、殆ど眞圓い形で、池畔は一帶に清らかな眞砂の狭い濱となり、濱を圍んで一面の青篠が茂つて居る。東南方の篠原は次第に高い丘となつて、やがて尾根に達するが、その向側は急峻な傾斜をなして遙の下に押下つて居る。その裾は直に伊豆の東海岸となるので、身丈を凌ぐ尾根の篠の中に立てば、殆ど眞正面に大島の三原山の噴煙が手に取るやうに見えて、その他は見渡すかぎりの青海原である。その他の三方は天城御料林の密林が涯もなく茂り續き、天城連峯第一の高峯萬二郎嶽が深い森林の衣を纏うて、鋭く東北の空に聳えて居る。

標高約一三〇〇米。

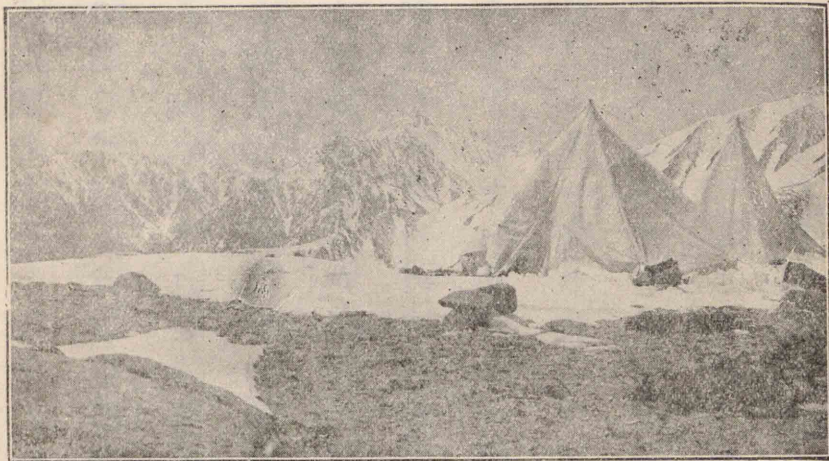
青篠の池は僅に周圍八町ほどしかないのので、噴火口の跡

といふのが可笑しい様だが、位置が山の尾根に當つて居るので四方の展望が利き、寧ろ可憐な物寂しい感を咬る。渚の眞砂の美しく清らかなのは快く、その眞砂の上一面に數限もない獸の足の跡が亂れて居る。さうだ、天城は廣大な御料林であると共に、大きな御獵場でもあるのだ。森に棲む獸たちには、この池の畔こそ恰好な遊び場であるらしい。昨夜でも出て來たらしい鮮明な足跡を、わが足元に眺めながら、これは鹿で、それは猪、あれは一體何であらうと、幼時故郷の獵師たちから聞いた記憶を辿つて、一つ一つ見分けて居ると、氣味が悪いといふよりも、却て懐しい心持が湧くのであつた。

伊豆國田方郡にあり、三島町より下田町に通ずる下田街道の中間に位す。附近には温泉頗る多し。

僕が其處に登つたのは四月の中頃で、天城の北麓に在る湯ヶ島温泉宿の若主人と村の青年と三人して、都合によつては、附近の谷間にある山葵澤（やまごゝ）の小屋でも見付けて一晩露營してもよいといふ考で、飲食物等をも十分に準備して行つたのであつた。併し流石に山の頂で、暖國の春とは言へ、意外に寒かつた。この寒さでは迎も露營は出来ぬと諦めて、餘分の飲食物などを嘗めながら、永い間その美しい砂の上に坐つてゐた。

「天幕でもあつたらなあ。」ふと、僕はさういふことを考へた。いつその事、只一人で、天幕と提燈と食料品と燐寸と手帳と一二冊の書籍とを持つて、二三日でも一週間でも、此處で暮



山上の天幕露營

して見たい。暗い夜でもよからう。月の夜でもよからう。或は星の降るやうな夜でもよからう。光り輝く明るい晝でも面白からう。眼の前の池、池を圍む森、仰ぎ見る蒼空、遙に望む青海原、どんなに静な自分をその間に見ることが出来るだらうなどと考へ出すと、もうぢつとしては居られない氣持にさへなつた。併し夜はさぞ寂しいことだら

う。野獸の心配はないだらうか。寧ろ、彼等の方が驚いて、只一つ點つて居る此方の提燈の火を、遠くて眺めることになるかも知れぬ。それとも物珍しさに、天幕の側まで寄つて來るか知らん。それはまづ、猪ではなくて鹿だらう。でなければ猿か兎か。夜明けがたには、さぞ珍しい澤山の鳥が啼くだらう。晴ばかり續けば可いが、雨が降ると困るだらう。風でも荒れたらどうだらう。だが一體に夏は雨風の少い季節だから大丈夫だらう。それにしても、第一に果して僕一人でその寂寥に耐へ得るかどうかなどと考へてゐた。

その時ばかりでなく、かういふ空想を僕は現在でも懐いてゐる。單に空想にとどまらず、天城を降りて歸ると間もな

く、小さな天幕を親類から借りて、自分の家の庭に張つて寢て見た事もあつた。併しその天幕は餘りに小さく簡易に出來てゐて、ほんの身を隠すことだけしか出來ないので、もう少し大きいのを買ひたいと思つて居る。これで天幕が手に入れば、直に其處此處の野に山に、天幕生活をやつて見たいと思ふ場處が随分にある。

天城の青篠の池畔は言ふまでもない。富士の裾野の中心をなす大野原（二）といふ固有名詞で呼ぶ一大高原、青薄の茂つて居る其處の窪地には、是非、一夜の露營を試みたい。一大高原とは言へ、其處はべた一面の平原ではなく、大海の波濤に似て、緩かなカーブ（三）を持つた丘が、うねうねと延びて居る。

駿河國駿東郡に屬す。富士山の東南麓。

(二) Curve.

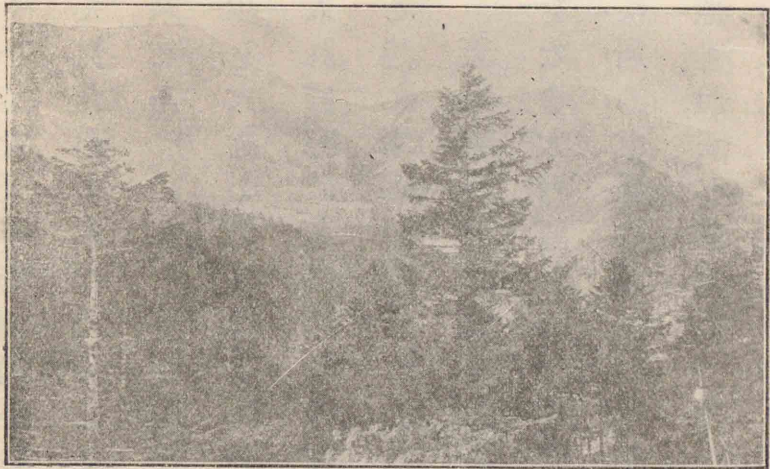
彎曲。

標高約二九〇〇米。山容の壯大と高山植物の多きを以て著名なり。

松本市より島島を経て上高地温泉に達する間にある峠。標高二一三二米。

槍ヶ嶽にその源を發し、流れて犀川となり千曲川となり終に信濃川となりて日本海に注ぐ。

標高約二一〇〇米。活火山。武藏國に屬す。甲斐との國境に所謂秩父連山聳ゆ。



嶽ヶ八

甲信に跨がる八ヶ嶽の裾野も、亦天幕生活を思はせるに十分な廣さと美しさを有して居る。徳本峠を越えて、水晶のやうな透徹つた水の流れる梓川の畔、白樺の下蔭に燒岳の噴煙を見上げる邊も好からう。まだ見ぬ秩父の奥にも辿り入り、太古さながらの大森林の間にも天幕を張りたいたいものだ。信飛越國境に天を劃して白雪に輝き

所謂日本アルプス。

紫に霞む連嶺の尾根より尾根へと攀ぢ、僅の岩陰に、脚下に漂ふ雲の海を眺めやる露營の快はどんなであらう。併し僕は必ずしも普通の人には行き得ぬ場處のみを選ばうとは思はない、又獨り野や山とのみも思はない。河畔海邊も亦わが好む所である。要は塵界を離れて、暫し大自然を友として生活したいと思ふのである。(若山牧水の文に據る)

七 眞田大助

元和元年五月七日、眞田左衛門佐は譽田口に在つて秀頼公の御出馬を待ちわび、子息大助を人質として城へ入れんと言ひけるに、大助この時十五歳、父左衛門佐に答ふるやう、

眞田幸村。(1110)
豊臣秀頼。(1117)

「今日の合戦に父御は討死の御覺悟と察し候。生れて父母の懷に人となり、十五歳になり候まで、片時も御側を離れ候はぬ母様には、去年御城へ参向の時、生きて御別れ申し上げ、その後、御文の度毎に「最愛の一子なれば、長らへさせたまきは山山なれど、弓矢とる身の習なれば、構へて父御の御最期に後れず、同じ枕に討死し、眞田の家名を揚げてよ。」と常に御教訓ありしに、唯今、父御を見捨て参らせ、御城へ歸るは存じもよらぬ事に候。唯いつ迄も御供して、父御の討死し給はば、御死骸に並び、大助も同じく討死を遂げ候はん。」と思ひ切つたる氣色にて、父が鎧の袖に取着き、離るべくも見えざれば、父左衛門佐は更にも言はず、これを見聞ける人人は泣かぬ者こそなかりけれ。

そなかりけれ。

左衛門佐は眼蓋に餘る涙を拂ひ、大助を礎と睨み、阿ノト早也さても未練の繰言かな。武士の家に生れし者は、時と場合に依りて親をも身をも忘れてこそ弓矢の道に叶ふべけれ。ましてやこれは、御城に歸り、秀頼公の御最期の御供せよといふなるを、父がこの期の命を用ひずば、君には不忠、父には不幸ぞ。少時の別はありとても、冥途に於て必ず逢はん。早早御城へ歸るべし。」と詞もあらく、大助が取継りたる手を拂へば、大助今は詮方なく、殘惜しげに父を見て、さらば御城へ歸るべし。復來世にて見参。の一語を殘し別れ行く。父の幸村は、ハシモレラスヨさらぬふりにはもてなししかど、暗涙胸に溢れしなるべし。

かくて大助は城に入りしに、ほどなく敵軍城に攻入りしかば、附添ひ來れる郎黨（ヒトダマ）は騒ぐ身方に隔てられ、大助ただ一人となり、秀頼公の御供して、蘆田曲輪米見矢倉に籠り居り、七日の朝食したる儘にて、翌八日午の刻まで矢倉の下に居たりしが、大助も秀頼公御先途の御供三十二人の一人なれば、曲輪の中に入り、秀頼公の御生害を今か今かと待つ中も、父の行方の心許なく、城中に遁れ入りくる人人に向ひ、眞田（マシタ）は何となり候ぞ、と思ひ餘りて聞きければ、その中の一人、さん候、眞田殿は天王寺の前にて關東軍大勢の中へ斬つて入り、馬を縦横に駈廻し、花花しく戦ひしが、終に叶はず討死し、槍十本ばかりにて槍玉に揚げられ候、と慥に言ふ者ありき。

大助はそれより物をも言はず、去年母に別るる時、最期にはこれを持ちて討死せよ、とて與へ給ひし水晶の數珠を、鎧の引合せより取出し、念佛してぞ居たりける。速水守之これを見て不憫に思ひ、大助が傍に立寄り、貴殿は一日譽田にて手柄なる太刀打、その名高し、又高股に槍手をも負ひたる由聞及べり。疵の痛みは無きか、秀頼公にもやがて御和談調ひなば、御命には別條なき筈なれば、貴殿は早早立退き給へ、某人を添へ、眞田河内殿まで送り届け申すべし、と、いと懇に聞えしかども、大助はいらへもせず、ただ口中にて念佛を唱へゐたり。

八日午の刻といふに、秀頼公御生害ありしかば、御供の男

*
叔父眞田信之、
この時事軍にあ
りき。

女三十二人、皆一同に生害し、矢倉矢倉に火をかけて、同じ煙に立ちのぼりぬ。中にも眞田大助は心靜に鎧を脱ぎ、十五歳を一期として、腹十文字に搔切りて、父と君とに殉ぜしは、天晴、武士の子孫ぞと、譽めもし惜しまぬ人ぞなかりける。

(柴野栗山―古土茗話)

八形

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衛は、五畿内・中國に聞えた大剛の士であつた。

その頃、畿内を分領してゐた筒井松永・荒木和田・別所など大名・小名の手の者で、「槍中村」を知らぬは恐らく一人もなか

つたであらう。それ程、新兵衛はその扱きだす三間柄の大身の槍の鋒先で、魁殿の功名を重ねてゐた。その上、彼の武者姿は、戰場に於て水際立つた華やかさを示してゐた。火のやうな猩猩緋の鎧を着て、唐冠纓金の兜を被つた彼の姿は、敵身方の間に輝くばかりのけさやかさを持つてゐた。

「ああ、猩猩緋よ、唐冠よ。」と、敵の雜兵は新兵衛の槍先を避けた。身方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに敵勢を支へて居る猩猩緋の姿は、どれほど身方にとつて頼もしいものであつたか分らない。又嵐のやうに敵陣に殺到する時、その先頭に輝いてゐる唐冠の兜は、敵にとつてどれほどの脅威であつたか分らない。

かうして槍中村の猩猩緋と唐冠の兜とは、戦場の華であり、敵に對する脅威であり、身方にとつては信賴の的であつた。

或日、元服してから、まだ間もないらしい年若な侍が、新兵衛殿、折入つてお願がござる。」と新兵衛の前に手を突いた。新兵衛は、「何事ぢや、そなたと我等との間に、左様な辭儀は入らぬぞ。望といふを早う言うて見い。」と育むやうな慈顔を以て相手を見た。

「外の事でもをりない。明日はわれら初陣ぢやほどに、何ぞ華華しい手柄をして見たい。就ては、御身様の猩猩緋と唐冠の兜とを貸してためらぬか。あの鎧と兜とを着て、敵の眼を駭かして見たうござる。」

「はははつ、念もない事ぢや。」と新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は、相手の子供らしい無邪氣な功名心を、快く受入れることが出来た。

「だが、申して置く。あの鎧や兜は、申さば中村新兵衛の形ぢや。そなたが、あの品品を身に着ける上からは、われら程の肝魂を持たいては叶はぬことぞ。」と言ひながら、新兵衛は再び高らかに哄笑した。

その翌日、攝津平野の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の軍勢と鎬を削つた。今に戦が始まらうとする時、何時もの如く猩猩緋の武者が唐冠の兜を旭に輝かしながら、敵勢を尻

目にかけて、大きく輪乗をしたかと思ふと、駒の頭を立直して、一氣に敵陣に駈入つた。吹分けられるやうに敵陣の一角が亂れた處を、猩猩緋の武者は槍をつけたかと思ふと、もう三四人の端武者を突伏せて、悠悠と身方の陣へ引還した。

その日に限り、黒皮緋の鎧を着て南蠻鐵の兜を被つてゐた中村新兵衛は、會心の微笑を含みながら、猩猩緋の武者の華華しい武者振を眺めてゐた。そして自分の形だけですらこれ程の力を持つて居るといふことに、かなり大きい誇を感じてゐた。彼は二番槍は自分が合さうと思つたので、駒を乗出すと、一文字に敵陣に殺到した。

猩猩緋の武者の前には、戦はずして浮足立つた敵陣が、中

村新兵衛の前にはびくともしなかつた。その上に、彼等は猩猩緋の「槍中村」に突きみだされた恨を、この黒皮緋の武者の上に復讐しようとして猛り立つた。

新兵衛は平生とは勝手が違つて居ることに氣がついた。何時もは、虎に向つて居る羊のやうな怖氣が敵にあつた。彼等が狼狽して、血迷うてゐるところを突伏せるのに、何の造作もなかつた。今日は、彼等は對等の戦をする時のやうに勇み立つてゐた。どの雑兵も、どの雑兵も、十二分の力を新兵衛に對して發揮した。二三人突伏せることさへ容易ではなかつた。敵の槍の鋒先が、ともすれば身をかすつた。新兵衛は必死の力を振つた。平素の二倍の力をさへ振つた。併し彼は、と

もすれば打負けさうになつた。氣輕に兜や猩猩緋を貸した
ことを後悔するやうな感じが、頭の中を掠めた時であつた
敵の突きだした槍が鎧の裏をかい、既に彼の脾腹を貫い
てゐた。(菊池寛一極樂)

九 桶 峽

尾張國知多郡共
和村大字桶峽。
永祿三年(一三三〇)
織田信長、今川
義元をこの地に
襲ひてその首を
獲たり。

天地に轟くはたたかみ
篠を束ねて降る雨を
神のたすけと唄つたひ
轡をつつみ草摺卷きて
攻めいる必死の三千騎

(一) (二) (三) (四)
つれも知多郡
に属する部落。

(五)
尾張國西春日井
郡清洲城。

杳掛大高笠寺の

野にも山にも充ち満ちたる

四萬五千の駿河の軍勢

明日は清洲を攻めおとし

決河破竹の勢にて

尾張の國をさだめんと

心おごりの酒ほがひ

松の嵐は琴のしらべ

鳴神のおとは鼓のひびき

よに心地よきうたげやと

佩きつる太刀の緒うちとけて

歌ひつ舞ひつ興もやや
闌なりしをりしもあれ

四面におこる鬨のこゑ

すはや敵ぞといはせもあへず

雨よりしげき寄手の槍先

嵐を吹きまくかたきの太刀風

天たちまちくつがへり

地見る見る裂け

きらめく稻妻光のひまに

二千餘人の玉の緒は

草葉の露と消えにけり

ああさだめなき人の世や

たのまれぬ人の身や

さもいかめしく轟きし

名はときの間のはたたがみ

夢の名残の松風も

昔のあとや尋ねらん

さみだれ寒き桶峽 (中村秋香—不盡廼舍遺稿)

一〇 拙速

人の嗜好は千差萬別である。又父母より享けたる性質も決して同一ではない。随つて、人が此の社會に出て爲さうと

思ふ事業は種種様様である。或は實業家、或は軍人、或は官吏、或は學者、僧侶、其の目的とする所は等しくはない。併し兎にも角にも、男兒たる者は、長い一生を空しく過すと云ふやうな意氣地の無い事では可かぬ。何なりとも一つ、一個の男兒として愧ぢざるだけの事業を成し遂げなければならぬ。事に依れば、震天動地の大事業をも成し遂げることが出来なるとも限らぬのであるから、男兒、須く手に唾して起つべきである。

世には知識も相應にあり、學問も無いではないが、餘り用心深く、兎角、引込思案であり、何時か何事かをしようと思ふ考はあるけれども、容易に何事にも着手しないで、その中

に段段機會は過去り、境遇は變化して、到頭、一生涯何等の事業をも成し遂げずして墓場に入つてしまふといふやうな人が、随分あるものである。勿論、人は用心しなければならぬけれども、餘り用心し過ぎて、ただ手を束ねて、老と死とを待つのは情ない事である。苟も活社會に出て事業を成さうと思ふならば、多少失敗の虞はあつても、突進して機會を捉へなければならぬ。

蓋し、活社會に奮闘して事業を成さうと云ふものは、どれだけかの失敗は如何なる人でも免れない。併し其の失敗は皆活きた教訓となるのである。一度失敗すれば、その次には同一の失敗は反復しない。かくて段段と自己を訓練して行

くのが、所謂經驗であり、熟練である。

されば、暴虎馮河の戒むべきは勿論ではあるけれども、徒に遲疑逡巡せず、自ら進んで取る決心をしなければならぬ。孫子に「兵は拙速を聞く、未だ巧の久しきを觀ざるなり」とある。これは兵法の語であるが、活社會に奮闘する場合にも能く適合するのである。迅速に事をなせば、巧と云ふ點に於ては十分でない、どうしても拙くなる虞はある。拙いが宜しいのではない、巧と云ふことが悪いのでもない。けれども餘り巧にやらうと急ぐれば、つい遅くなつてしまふ。遅くなるよりは、少少拙くても迅速にやつて退けた方が成功の見込がある。

支那の兵法の古書。

これが成功の一秘訣である。既に拙速であるから、往往失敗もあらう。併しその失敗は成功の基であるから、決してこれが爲に沮喪落膽すべきでない。かくて失敗を重ねる毎に經驗と熟練とを加へ、一難を経る毎に進取の氣象が一倍して來れば、遂には偉人傑士たるべき大決心、大勇猛心を養成し得るのである。(井上哲次郎の「人格と修養」に據る)

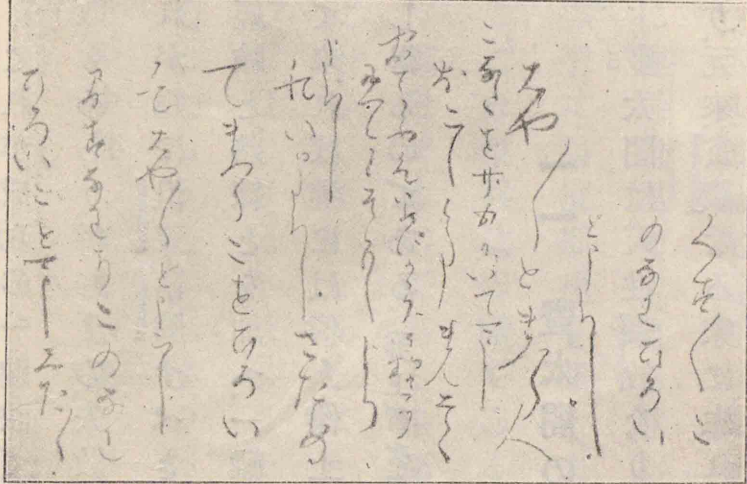
一一 豊太閤の逸話

豊太閤は天性豪放なりしかば、頗る洒脱なる逸話に富めり。元來、貧賤なる家に生れて、生涯の大部分を戰鬥攻伐の事に委ねたれば、文字の知識には乏しかりしが、少しもこれに

豊臣秀吉。(二六) 一三五〇

頓着せず人に與ふる書翰命令の類を自ら記す時は、多く平

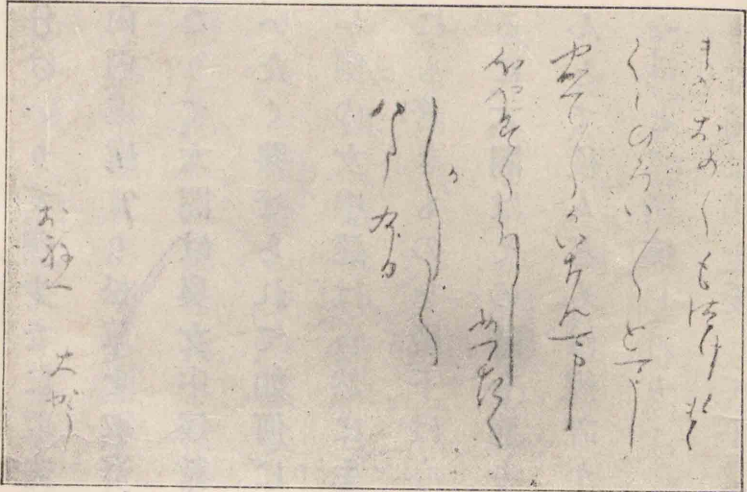
かへすゝこの名はひろいと申候へく候こなたを廿五日にいて可申候やがて参候て御めにかへり御物語申候へく候はやくとまつらんおこし候事まんそくに候そもしよりれい申候へく候さためてまつら子をひろい候てはや／＼と申こし候間すなはちこの名はひろいこと可申候したした



豊太閤

假名にして、偶漢字あれば過半は宛字なりき。その上に文章の拙しとおもふ所は、屢消しては書續けたれば、當時これを「お草紙の御文書」と稱して、諸將はこれを得るを以て名譽となしたりとぞ。
名高き醍醐の花見の折にやありけん、太閤は祐筆を召して一篇の通牒を起草せしめたり。

まておの字もつけ候ましく候ひろい／＼と可申候やがて／＼凱陣可申候心やすく候へく候めてたくかしく八月九日
大から
おねへ
参



筆蹟

祐筆は命によりてこれを書きをりしが、忽ち筆を停めて何事か思索する體なるに、太閤何を案ずるか」と問ふ。祐筆は恐縮して、實は醍醐の醍といふ文字をふと失念したれば」と答ふ。太閤焦立ちて、益なき事に屈託するものかな。それはかく書くべし」と言ひつつ、指にて疊の上に大の字を書きて示したりといふ。
或歳、東山に松茸多く生えたりと聞きて、近日、茸狩を催さ

んとありしかば、役人ども見分に出かけたるに、早くも諸人分けいりて、殘少なに取去りたり。かくては興なからんとて、内内、處處より松茸を取寄せて巧に植ゑおきたり。その日になりて、太閤は奥女中達數多召連れて山に登り、茸の多きにいたく興ぜられて、如何にも満足の體なりけり。これを見てお側の女中達は、自然に生えし茸と人の植ゑしとは、誰が目にも著しきものを、殿下は心づかせ給はずや。とて袖を引きけるに、太閤はその辭を遮りつつ、言ふな、言ふな。我等を喜ばせんとて、役人どもは幾許か骨折りつらん。その骨折を買はてやは。とて微笑しけり。

太閤は鶴を愛して、平常これを苑中に飼はせたり。一日、監

者の誤りて取逃したりしかば、恐惶罪を請ひしに、逃げたる鶴は外國へ飛去りつらんか。と問ふ。飼鳥のことなれば、さまざま遠くはえ飛び候はじ。と答ふるに、外國に行かねば、何處にありとも、わが樊籠の中なり。とて、監者の失職を問はんともせざりき。

天正十八年。○
○
○
太田道灌の曾孫
名は養正。

小田原落城の後、一日、太田三樂を招いて軍事を談ぜしめ、これを傾聽しつつ感歎し居たりしが、ややありて、その方は智仁勇の三徳を具へたる良將なり。それにひきかへ、我にはその一徳だになし。然るに不思議にも、その方は一國だに取れぬに、我は天下を取れり。天下を取ることのみは我が得手なりと見ゆ。とて微笑しけりとぞ。(福本日南の文に據る)

(一) London.
英國の首府。

一一一 倫敦の霧

昨夜は夜一夜、枕の上でばちばちと云ふ響を聞いた。これは近處に大停車場のある御蔭である。この停車場には、一日のうちに汽車が千幾つか集まつて来る。それを細かに割付けて見ると、一分に一列車位づつ出入をする譯になる。其の各列車が、霧の深い時には、停車場間際へ來ると、何かの仕掛で、爆竹の様な音を立てて合圖をする。信號の燈光は青でも赤でも、全く役に立たないほど暗くなるからである。
寢臺を這下りて、北窓の日蔽を捲きあげて外面を見下すと、外面は一面に茫としてゐる。下の庭は、芝生の底から、三方

(二) Blind.

(三) Lawn.
芝生。

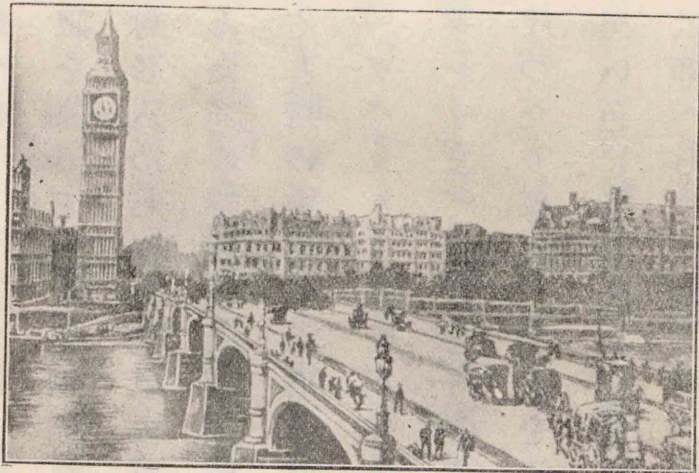
煉瓦の塀に圍はれた一間餘の高さに至る迄、何も見えない。ただ空しいものが一杯詰つてゐる。さうしてそれが寂として凍つてゐる。隣の庭も其の通りである。此の庭には、綺麗なローンがあつて、春先の暖かい時分になると、白い髻を生したお爺さんが日向ぼつこをしに出て來る。其の時、このお爺さんは何時でも右の手に鸚鵡を留らしてゐる。さうして自分の目を、鸚鵡の嘴で突つかれさうな位に近く、鳥の側に持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、頻に鳴きたてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を引いて、斷えまなく芝刈機械をローンの上を轉がしてゐる。この記憶に富んだ庭も、今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿のそれと何の境もな

*Gothic.

く、のべつに續いて居る。

裏通を隔てて向側に、高いゴシック式の教會の塔がある。其の塔の灰色に空を刺す天邊で、何時でも鐘が鳴る。日曜は殊に甚しい。今日は鋭く尖つた頂は無論の事、切石を不揃に疊み上げた胴中さへ、所在がまるで分らない。それかと思ふ處が心持黒いやうであるが、鐘の音は丸で響かない。

表へ出ると、二間ばかり先は見える。その二間を行盡すと、また二間ばかり先が見えて来る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩くほど、新しい二間四方が現れる。その代り、今通つて来た過去の世界は、通るに任せて消えて行く。



橋 - グスンミトスエウ

四つ角で馬車を待合せてゐると、鼠色の空氣が切抜かれて、急に眼の前に馬の首が出た。それなのに、馬車の屋根に居る人はまだ霧を出切らずにゐる。此方から霧を冒して飛乗つて下を見ると、馬の首はもう薄ぼんやりとしてゐる。馬車が行違ふ時は、行逢つた時だけ、綺麗だと思ふ間もなく、色のあるものは濁つた空の中に消えてしまふ。漠漠として無色の裏に包ま

(←) Westminster bridge.

(二) Victoria.

(三) Tait.

(四) Battersea.

れて行く。ウエストミンスター橋を渡る時、白い物が一二度
眼を掠めて翻つた。眸を凝して其の行方を視詰めてみると、
封じ込められた大氣の裏に、鷗が夢のやうに微かに飛んで
ゐた。其の時、頭の上で、大時計が嚴かに十時を打ちだした。仰
ぐと、空の中であたまたま音だけがする。

ヴィクトリアで用を足してテート畫館の傍を河沿にバ
タシーまで來ると、今迄鼠色に見えた世界が、突然四方から
ぱつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く身の周圍に流した様に、
黒い色に染つた重い霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套
は抑へられたかと思ふほど濕つてゐる。薄い葛湯を呼吸す
る位に氣息が詰る。足許は覺束なさは無論のこと、穴藏の底
を踏むと同然である。

を踏むと同然である。

自分は、此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇ん
だ。自分の傍を人が大勢通るやうな心持がするけれども、肩
が觸れあはない限は、果して人が通つてゐるのか何うだか
疑はしい。其の時、この濛濛たる大海の一點が豆位の大きさ
にどんよりと黄色く流れた。自分はそれを目標に四歩ばか
りを動いた。すると或店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の中
では瓦斯を點けてゐる。中は比較的あかるい。人は常の如く
振舞つて居る。自分はやつと安心した。

バターシーを通り過ぎて、手探りをしないばかりに向うの
岡へ足を向けたが、岡の上には、同じ様な横町が幾筋も並ん

てゐて、青空の下でも紛れ易い。自分は、向つて左の二つ目を曲つた様な気がした。それから二町ほど眞直に歩いた様な心持がした。それから先は丸で分らなくなつた。暗い中になつた一人立つて首を傾けた。右の方から靴の音が近寄つて來たと思ふと、それが四五間手前まで來て止つた。それから段段遠退いて行く。終には全く聞えなくなつた。あとは寂としてゐる。再び自分は暗い中になつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。(夏目漱石)

一三 或日の馬琴上

馬琴は、八犬傳の稿を繼ぐべく、何時ものやうに机に向つ

瀧澤解。曲亭馬琴と號す。江戸時代の最も著名なる小説家。嘉

永元年十一月歿す。(一三三三)前後三十年に互りて馬琴が心血を注ぎしもの、委しくは南總里見八犬傳といひ百九冊より成る希有の雄篇。



曲亭馬琴

返した。すると、何故か、書いてある事が自分の心持とびつたり合致しない。字と字との間に不純な雑音が潜んでゐて、それが到る處で全體としての調和を

搔亂して居る。最初、馬琴はそれを自分の癪が昂ぶつて居るからだと解釋した。

「今の自分の心持が善くないのだ。書いてある事は、書切れ

る處までどうにか書切つてゐる筈だから。さう思つて、彼はもう一遍讀返した。併し調子の狂つてゐる事は依然として事實だ。彼は老人とは思はれない程、心の中で狼狽した。このもう一つ前のはどうだらう。

彼は其の前に書いた分へも眼を通した。すると、これも亦徒に粗雑な文句ばかりが散らかつて居る。彼は更にその前のを讀んだ。さうしてその前の前のを讀んだ。

併し讀むに従つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して来る。そこには何等の想像をも與へない敘景があつた。何等の感激をも含まない咏歎があつた。又更に何等の理路をも辿らない論辯があつた。彼が數日を費し

て書上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見れば、悉く無用の反古に過ぎなかつた。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これでは、初から書直すより外はない。」

彼は心の中でかう叫びながら、忌忌しさうに原稿を向うへ突きやると、疊の上に片肘ついてごろりと横になつた。が、まだ氣になると見えて、眼は机邊を離れない。馬琴は此の机の上で弓張月を書き、南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書いて居る。机の上の文房具は、何れも悉く彼の創作の苦しみに久しい以前から親しんで居る。其等の物を見るにつけても、今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな

(一) 梅説弓張月の略、三十冊より成る小説。
(二) 三七全傳南柯夢の略、六冊より成る小説。別に占夢南柯後記八冊あり。

また彼自身の實力が根本的に怪しいやうな思はしい不安の念の湧くのを、彼は自ら禁ずる事が出来ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書く積りてゐたが、それも或は人並の自惚の一つだつたかも知れない。かういふ不安は、彼の上に何よりも堪へ難い落寔たる孤獨の情を齎さずには置かなかつた。

馬琴は、彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜である事を忘れなかつたが、それだけに、又同時代の屑屑たる作者輩に對しては、傲慢であると共に、何處迄も不遜であつた。その馬琴に、結局自分も彼等と同等の能力しか所有して居なかつたのだといふ事が、又更に厭ふべき遼東の豕だつた

*馬琴と同時代の小説家には山東京傳・柳亭種彦・十返舎一九・式亭三馬など著名なるもの少からず。

といふ事が、どうして易易と認められよう。而も彼の強大な「我」は、「悟」と「諦」との蔭に避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへた儘、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、絶望の威力と靜に戦ひ續けた。若し此の時、彼の後の襖がけたたましく開かれなかつたら、さうして「お祖父様、唯今」といふ聲とともに、柔かい小さな手が彼の頸へ抱着かなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な気分の中に何時までも鎖されてゐた事であらうが、孫の太郎は、襖を開ける否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上に勢よく飛びあ

がつた。

「お祖父様、唯今。」

「おお、よく早く歸つて來たな。」

この語とともに、八犬傳の著者の皺だらけな顔は、今迄とは別人のやうな喜悅の色に輝いた。

一四 或日の馬琴下

茶の間の方では、甲高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑かに聞えてゐる。時時、男の太い聲がまじるのは、折から伴の宗伯も歸り合せたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞

* 染色の名。栗色の濃きもの。

面目な顔をして、天井を眺めた。外氣にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻の孔のまはりが、息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

* 栗梅の小さな紋付を着た太郎は、突然かう言ひだした。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日。」

「御勉強なさい。」

馬琴はとうとう噴出した。が、笑の中ですぐ語を接いで、

「それから。」

「それから、ええと、癩積を起しちやいけませんつて。」

「おやおや、それきりかし。」

「まだあるの。」

太郎はかう言つて、顔を仰向けながら、自分もまた笑ひ出した。眼を細くして、白い齒を出して、小さな齧をよせて笑つて居るのを見ると、これが大きくなると、世間の人間のやうな憐むべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の感に溺れながら、こんな事を思つてゐた。すると、それが更に彼の心をこそぐつた。

「まだ何かあるかい。」

「まだね、いろんな事があるの。」

「どんな事が。」

「ええと、お祖父様はね、今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりませうから。」

「ですからねえ、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつと、もつと、ようやく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事を言つたのだい。」

「それはね。」

と、太郎は悪戯さうに、ちよいと祖父の顔を見た。さうして笑

ひながら反問した。

「だあれだ。」

「さうさな。今日は御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として絲鬢奴の頭を振つた太郎は、祖父の膝から半ば腰を擡げながら、顎を少し前に突きだすやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音様がさう言つたの。」

かう言ふや否や、此の子供は家内中に響き渡りさうな聲

で、嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から跳びのいた。さうして、巧に祖父をかついだ面白さに、小さな手を叩きながら、轉げるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは此の時である。彼の唇には幸福な微笑が浮んだ。それと共に、彼の眼には何時か涙が一ばいに溜つた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は母が教へて言はせたのか、それは彼の問ふ所ではない。この時、この孫の口から、かういふ語を耳にしたのが不可思議なのである。

「觀音様がさう言つたか。勉強しろ。癩積を起すな。さうして

もつとよく辛抱しろ。」
老いたる藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうにうなづいた。(芥川龍之介の「傀儡師」に據る)

一五 感謝

私は終日野原や林の中を駈けまはる
ああ私の心は空吹く風の心であつた
ああ雲に歌ふ小鳥の心は私の心であつた
風の心は夕日の影で静まり
小鳥の心は星の光で黙る

私の心も驚いて家のことを思ひだす

そつと家に歸つて

丁寧な言葉で母に言ふ

「遊び過ぎました

どうぞ勘辨して下さい」

食卓の上には私の晚餐が温められ

火鉢にはかつかと炭が燃えてゐる

「お母さんおいしく御飯を頂きました」

かう私は常に似合はぬ感謝をする
それを聞いた母はちつと眼を閉ぢる
何だか母は心の中で泣いて居るやうだ (野口米次郎)

一六 夕立雲

夕飯をすまして庭へ出ると、北からひやりと風が來た。見
上げると、北にあたつて一團の紺靨色の雲が立つて居る。そ
の紺靨の雲を背にして、こんもりした隣家の杉や、檜の木立
や、孟宗竹の藪などが、生なま生なましい緑を浮かして居る。

「夕立が來るぞ。」と、予は大聲に叫んで、手速く庭の干物や履
物などを片づける。裏庭では下婢が駈けまはつて洗濯物を
取入れた。

やがて、食卓を離れた妻兒が庭に下りて來た頃には、北天
の一隅に埋伏して居た彼の紺靨色の雲が、倏すつ忽とつの中にむら
むらと湧起つて、何の艶もない濁つた煤煙色に變り、見る見
る天穹を這ひあがり、大軍の散開するやうに、東に、西に、天心
に、ずうずうと擴がつて來た。

予等は芝生に立つて、驚歎の眼を見張つて、この凄じい雨
雲の活動を見た。ああ、物凄しい雲の勢よ。今、青空は南の一軸に
捲縮められ、煤煙の色をした雲の大軍は、その青空をすら餘
さじものをと、南を指してひた押しに押寄せて居る。つい今
し方まで雨を戀しがつて居た、乾ききつた眞夏の喘は何處

へ消えたか。ただ十分か十五分の中に、大地は恐しい雨雲の下に閉ぢこめられて、冷たい暗い冥界となつた。

雲の運動は秒一秒劇しくなつた。南を指して流れる雲、渦捲く雲、眞黒に屯して動かぬ雲、雲の中から生れる雲、雲を摩つて移り行く雲、濃くなり、淡くなり、淡くなり、濃くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ逆流して南から東へ、世界中の煙突といふ煙突をここに集めて、煤煙の限なく湧くやうに、眼を驚かす雲の大行軍、音響を聞かぬが不思議な位だ。

この活動する雲の下に、予等は魅せられたやうに佇んだ。冷たい風がすうすうと顔にあたる。後れ馳せに雷がそろそ

ろ鳴りだした。北の方で紅や紫の電光が、時時ばつばつと天の半壁を輝かして閃く。近づく雷雨を感じながら、予等は猶頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした満天の雲は益南に流れる。水のやうに、霧のやうに、煙のやうに、空は何處も動いて居る。廣い空のどの一寸四方として動いて居ない處はない。悉く、恐しい勢を以て動いて居る。

仰ぎ見る予等は、流れる雲に引きずられて、ややもすれば駈けだしさうになる足を踏みしめ、踏みしめ、立つて居なければならなかつた。時時、西の方で或一處の空が、雲が薄れて、探照燈の光のやうな生白い一道の明りが斜に落ちて来て、深い深い井の底でも照すやうに、予等とその足下の芝生と

だけ明るくする。予等ははつと驚異の眼を見合す。かと思ふと、怒れる神の額のやうにもう眞闇に眞黒になつて居る。妻兒の顔は土色になつて居る。草木も人も息をひそめたかのやうに、一切の物音ははたと絶えた。何處から來たのか、犬のデカが不安な眼つきをして見上げつつ、大きな體を主人の脚にすりつける。

空は到頭雲をかぶつて了つた。著しく水氣を含んだ北風がばつばつと顔を撲つて來た。やがて粒だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。雲見の一群は急いで家に這入つて、母屋オモヤの南面の雨戸だけ残して悉く戸を閉めた。暗いのでランプを點けた。

ざあつと降りだした。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄じく見せて、ぴかりと電が光る。ざあざあと烈しく降りだした。見る見る庭は川になる。雨が飛石を打つて跳返る。目に入るかぎりの青葉が、一葉一葉に雨を浴びて、嬉しさうにぞくぞく身を顫はして居る。ああ、好いおしめりだ。かく言つた予は、更に「まだ七時前だよ、まあ」と下婢の獨りごつ聲に驚かされた。

夕立から、とうとう本降りになつて、雨は夜もすがら降り通した。(徳富蘆花「みみづのたはこと」)

一七 金華山

社務所を出た一行十人ばかり、白衣オビエの先達サシに案内されて

金華山を登る。坂が極めて峻しい。曉の霧がひやひやと梢を渡つて、雫がはらはらとかかる。老樹の鬱然ウツゼンとして濕つぽい間を行くので、深山のやうな寂しい心持がする。忽ち後の方で「猿」猿と怒鳴る者があるので、振りかへると、一行の中の三四人が立止つて梢を仰いで居る。余も急いで降りて行つて見ると、五六匹の猿が樅の喬木に枝移りをして居る所であつた。猿はゆさゆさと枝を揺がしながら、四足を立ててこちらを見降して居る。赤い顔が仄かに見える。森林の中で木傳ふ猿を見たのは、余は今が始めてである。からかつても見たい様な気がした。一行の者は樹の下へ集まつて、口口に「おんつあま」「おんつあま」と怒鳴つて、手を叩いたり、樹をゆすぶる

真似をしたりして騒いだけれども、猿どもは一向平気で、枝をゆさゆさと揺がして居る。猿といふものは、何處で見ても剽軽なものである。道者の一行が騒いで居るうちに、先達は一人で行つて了つたと見えて、後姿も見えなくなつた。ばらばらと先達の後を追掛けながら、道者の一人が言ふのを聞くと、この前に來た時には猿が丁度栗を落した所へ通りかかつたので、それを拾つてしまふと、枝にゐた猿が糞をかけたといふのであつた。

巔の小さな社の縁へ腰をかけて、一行の者は社務所で渡された紙包の握飯を開いた。縁先には僅二坪ばかりの芝生がある。何處から來たか、烏が二羽來て、一羽は芝生のめぐり

に並び立つ樹木のとある枯枝にとまり、一羽は足もとへ降りた。降りた鳥は嘴を上げたり、首を曲げたりして、握飯を欲しさうに見て居る。鹿にやらうと思つて持つて來た土産がまだあつたので、投げてやつたら、ひよいと一跳ね跳ねて、それを銜へて元の處へ戻つて、足で抑へて食むのである。さうして又嘴を上げたり、首を曲げたりして見て居る。握飯を包んだ紙を投げてやつたら、嘴で引返し引返しして、その紙の中の飯粒を食むのである。幾百千の參詣者が斷えず登山するので、鳥までがこんなに馴れて了つたものであらう。深い木立の間を雲霧に濡れつつ漸く山巔について、そぞろに人寰を離れたやうな心地で居る所へ、こんな鳥が飛んで來た

ので、更に別天地のやうに思はれた。一人が握飯の食残しをやると、何と思つたか、それを銜へたまま霧深い谷をさして飛んで行つた。飛ぶ時に、銜へた握飯がほろりと缺けて芝生の上へ落ちた。枯枝に止つて居た一羽は、こちらを見おろして居たが、遂に降りては來なかつた。が、暫くして、これも大きな聲で啼いたと思つたら、ついと芝生の上の飯をさらつて飛んで行つた。外洋の霧は山陰の梢を吹きあげて、蓬蓬として更に吹きおろす。木の葉が混つて飛散る。

霧の吹きつける中を、山陰を降りる。やつぱり樹木が深くて坂が急である。段段おりに行くうちに、霧が薄らいで、枯れた梢の間から空が朗かに見え出した。又誰か後の方で「鹿」鹿

と怒鳴つた。あれあれ」と一人が指して居る方を見たら、その時には「びおう」と啼いた聲ばかりで、鹿は見えなかつた。びおう」と再び啼いた時には、聲が遙に遠くなつた。三聲啼いた時には、やつと聞取れる程になつてゐた。

深い樹立を出ると、疎らな赤松が見え出して、凹んだ草原のやうな所になつた。先達は皆さん、此處は不淨場であ



金華山鹿山公園

ります。と言つて、自分が先に小便をした。一行の者も皆これに倣つた。草の中には羊齒の葉が秀でて、既に枯れた自然生の芍薬も混つて居る。

此處からすぐに海へ出る岸は、皆削りたつた大きな巖である。断面には縦横に切れ目があつて、恰も十文字に繩を掛けた大荷物が問屋の庭に積揚げられたやうな形である。小徑は此の斷崖の上を巡り、繞つて北へ走る。一行はばらばらになつて、先達に跟いて行く。左を仰いで見ると、鬱蒼たる山の巔は頭に掩ひかぶさり、その急峻な山の脚は、恰も物陰から大手を開いて現れた人が奔馬をばつたり喰止めたやうに、この小徑で切斷されて居る。小徑を挟んで、到る處、青芝と

狼

絲薄とが茂つて居る。絲薄の中には疎らに赤松が聳えて居る。時時、鹿に逢ふことがある。山陰に居る鹿は能く馴れては居ないと見えて、きつと逃げて行く。一つか二つか離れて居るのが、ひよつこり人を見ると、非常に狼狽して叢を跳ねて逃げて行く。絲のやうな脚で跳ねるのが、ふわふわとした綿の上でも跳ねるかと思ふ様に見えて、如何にも輕げである。驚いて逃げる時に「びおう」と細い聲で啼捨てるのである。五六匹も揃つて居る場合には、體と體と押合ふやうにして或距離の處まで行くと、けるつとして、何時までも此方を見返つて居る。無邪氣なものである。鹿の尻はもつこ禪をはめた様だなあ」といふ聲が後の方から聞えた。

やがて、大箱の岬といふ札の立つて居る處に出た。急な山の脚が、海へ踏込む前に青芝の小山を拵へて、其の小山の頂近くから截斷して海へ捨てて了つた時に、恐しい懸崖が出来た。これが大箱の岬である。四つに這うて覗いて見ると、ざつざつと碎ける白波が遙に下の方である。その遙な下の方に小さなものが動くやうに見える。それがだんだん昇つて近づくのを見ると、一羽の小さな蝶であつた。この邊の青芝は地に引着いたやうで、綺麗である。鹿が此の芝を食ひに来ることでもあるのか、豆粒のやうな糞が轉がつて居る。青芝の上に休んで居ると、何時の間にか蝶は懸崖の面を舞上つたものと見えて、小さな黄色い翅をひらひらと翻して遊ぶ。

際涯も知られぬ外洋を望めば、今日ばかりは波がないのかと思ふほど平靜である。余は暴風が一朝この平静な海を吹亂して、雲と相接して居る水平線の先の先から煽り立てて来る激浪が、この大箱の懸崖に吼えたけびて、飛沫が此の青芝へ氷雨の如く打ちかかる時に、牡鹿が角を振立てて此の岬に突立つ情景を想像して見た。(長塚節「炭焼の娘」)

一八 ^トラファルガルの海戦上

(二) Napoleon I. (1769-1821) (一) Trafalgar.

^ナポレオン一世、身を陸軍の一將校より起して、忽ち佛國の帝位を踐み、四方を制壓して天下を睥睨するや、列國の群雄、皆震懼屏息してその部下に屬せしが、ひとり英國のみは

(三) Boulogne. 佛國の東北

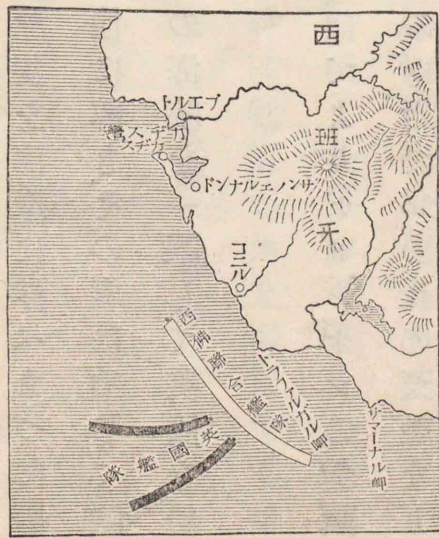
(四) Horatio Nelson. (1758-1805)

孤立を守りて敢て屈せず、その島國たるを利用して優勢なる海軍を備へ、海上の權力を握りて屢佛軍を悩ましたり。ここに於て^ナポレオンは畢生の力を盡し、雄兵十五萬を^ブローニッに集め、船舶二千五百餘隻を海岸に浮べ、まづ艦隊を四方に分ち、以て英國艦隊を他に導き、その虚に乗じて陸兵の大輸送を行ひ、二十餘海里の海峡を一躍して英國を粉碎せんとせり。

英國の海軍提督^{ネルソン}は、豫てより^ナポレオンの猖獗を制し、歐洲人民に自由を與ふるを以ておのれの天職なりと確信し居たりしが、今^ナポレオン大舉して英國を侵略せんとすと聞き、佛帝たとひ鬼神の術ありとも、その海岸を距

(一) Cadiz.
(二) Villeneove.

る一海里の外に出てしめじ」といひて、直に敵の艦隊を追尾して、カヂス港の附近に至りぬ。時に佛國の提督ビールヌーは西班牙艦隊と相合し、四十餘隻の軍艦を督して、死を決して英國艦隊と戦ふ用意をなせり。ネルソンこれを悟り、三十餘隻の軍艦を率ゐて、進みてトラファルガル岬の邊に達し、遂に敵の艦隊と相會す。時に西曆一千八百五年十月二十一日なり。



ネルソンは敵の横陣を布くを見て、喜色面に溢れ、總艦隊

(三) Collingwood.

(四) Victory.
(五) Blackwood.

を分ちて二隊の縦陣となし、副提督ユリンワードをしてその一隊を指揮せしめ、風下に方れる敵の後殿艦より第十二位に列せる艦の間に進入すべきを命じ、自らは他の艦隊を率ゐ、敵陣の中央を突貫して、まづその一部を撃破せんとせしが、佛將ビールヌーこれを察し、その艦隊を二列に排布し、前隊各艦の間に當る點に後隊の各艦を列せしめ、相依りて空隙なからしめたり。

時に英國艦隊の旗艦ヴィクトリー號の上甲板に佇立せるネルソン、傍なるブラックウッドを顧みて、「君は幾何の敵艦を捕獲せば、わが勝戦なる事を是認すべきか」と問ふ。ブラックウッド「十五隻を捕獲せば以て偉功となすに足らん」と

答ふ。ネルソン頭を振り、否、われは二十隻を捕獲するにあらずば満足すること能はざるべし。といふ。やがてその室に赴き、正装して燦爛たる數個の勳章を胸間に懸け、肅然として天に向ひ、神よ、願はくは、わが英國に赫赫たる大勝を授け、全歐洲の國民をその塗炭の苦しみより救ひ給へ。願はくは、わが將卒をして一人も卑怯の舉動をなすものなからしめ給へ。併せ願はくは、戦勝後、わが軍の事を處する、一に仁慈を以てせしめよ。ネルソンの一身は固より惜しむに足らず。只わが忠誠を憐みて擁護を垂れ給へ。と禱りて、やがて甲板に出てたるに、敵艦愈、近づく。英軍の意氣益壯なり。ネルソンまたブラックウードを顧みて、なほ一信號旗の掲げざるべから

* England expects that every man will do his duty.

ざるものあり。とて、直に信號兵に令し、信號旗を檣頭に掲げしむ。その信號は、英國は各自がその本分を盡さんことを期待す。といふにありき。英國總艦隊これを望みて狂喜措くこと能はず。拍手喝采の聲、海波もために震はんとす。ネルソン莞爾として、今ははや準備に於て遺憾なし。餘はただ神とわが正義とを頼まんのみ。といひしが、やがて、接戦せよ。との信號旗を檣頭高く掲げしめたり。

旗艦ヴィクトリー號、前驅率先して進みしが、着弾距離に達するや、數隻の敵艦之に向ひて砲撃を始め、飛彈こもごもネルソンの頭上に轟く。ブラックウード我が艦に還らんとして、ネルソンと握手しつつ、余はまた速かに本艦に來りて、

(-) Santa Anna. (-) Royal Sovereign.

敵艦二十隻を捕獲せる閣下の壯貌を拜すべし。といへば、ネルソン、われは既に國家のために一身を犠牲にせんとす。再び相語ることを期せず。といふ意氣軒昂、爽快の色その眉宇の間に溢れたり。

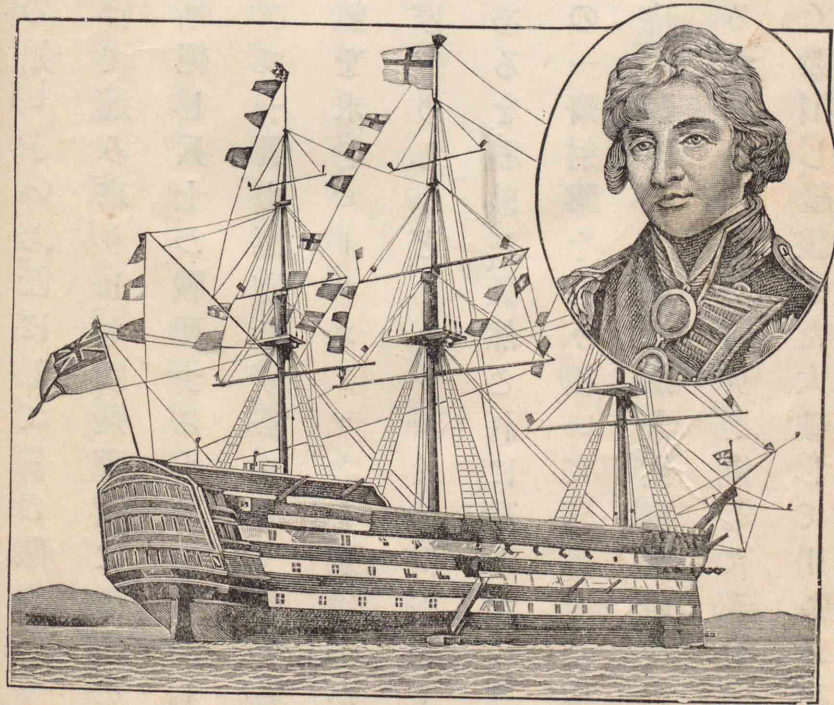
一九 トラファルガルの海戦下

時に副提督コリンウッドの旗艦ローヤルサベレーン號は、その艦隊の先頭に立ち、健帆風を孕み、西班牙の戰艦サントアンナ號に向ひて進みしが、その艦尾に達するや、二彈を重填せる左舷の大砲を一齊に發射し、忽ち之を撃破せり。ネルソン遙に之を望み、欣然として左右を顧み、好丈夫の意

氣を見よ、猛烈鬼神の如し。といふ。既にして佛の諸艦皆ヴィクトリー號を目蒐けて進み來りしかば、飛彈實に急霰の如く、艦體破壊し、索具斷絶し、兵士の戰死するもの頗る多し。然れどもなほ堅く忍びて一發も應砲せず。益進みて佛の提督ピールヌープの旗艦を求む。ピールヌープ之を避けんがため、殊更に將旗を掲げざりしかど、ネルソンその陣形によりて、旗艦の第二位にあるを看破し、猛然これに薄り、まづ艦窓に向ひて小銃五百の一齊射撃を行ひ、續いて三彈を重填せる左舷の大砲を一時に發射せり。波濤驚き、雲霧裂け、その音百雷の一時に落つるが如く、敵兵四百算を亂して殪れ、その二十門の巨砲は悉く毀損し、艦體また大破して用ふる事能

(←) Redoubtable.

はざるに至れり。
 ここにネルソン
 愈奮戦して進み、右
 舷の諸砲を以て別
 に敵艦レッタータブ
 ル號を砲撃しつつ、
 遂に之に衝突せり。
 この時に當り、英の
 諸艦長各、猛進して
 佛艦と接戦し、兩軍
 の戦正に酣にして、



號一リトクィヴとンソルネ

(⇒) Hardy.

奮闘殆ど一時間ならんとする折しも、レッタータブル號の檣
 樓より一發の銃丸飛び來りしが、甲板上を急走せるネルソ
 ンの肩に中りて之を倒したり。衆駭きて相集まり、直にネル
 ソンを扶け起しぬ。ネルソン、艦長ハーディーを見て、佛奴われ
 を狙撃したるがため、彈丸わが脊髓を貫けり。恐らくは起つ
 能はざるべし。といふ。かくてネルソンはわが負傷の一事、徒
 に士氣を沮喪せしむることあらんとて、徐に手巾を出し、わ
 が面部と勳章とを蔽ひ、擔はれて治療室に入りぬ。
 時にレッタータブル號の兵士、艦上に襲撃隊を組み、將に
 突入し來らんとす。英兵急に小銃を亂射して之を却け、尙大
 小砲を連發してその過半を殪ししかば、彼等は力竭きて遂

に降伏せしが、續いて敵艦の其の旗章を下して降を乞ふもの引きも切らず、ヴィクトリー號の兵士拍手歡呼して、聲雷の如し。ネルソン治療室にありて之を聞き、思はず微笑せり。ハーディー偶、ネルソンの側に來り、捕獲の敵艦十二隻に下らず、といへるに、ネルソン、わが艦の敵に降れるなきか、と問ふ。ハーディー聲に應じて、一隻もなし、と答ふ。ハーディーやがて甲板に上り、一時間を経ずして再び訪ひ來れるに、ネルソンその艦隊をして投錨せしめんとの念切なりしかば、之をハーディーに命ず。ハーディー、艦隊の運動は副提督の指揮に任せ給へ、と言ひしに、ネルソン頭を振りて、苟もわが殘喘なほ存する間は、何ぞ指揮の權を他人に委せん、といふ。既にして

薄暮に至り、佛西兩國の聯合艦隊大敗して、砲聲全く收まり、ネルソンの氣息も亦奄奄たり。左右口をその耳朶にあてて、「全勝わが軍に歸し、敵艦二十隻を捕獲せり」と報ぜしに、ネルソン莞爾として遂に瞑せり。(小笠原長生—帝國海軍史論)

二〇 森の繪

暖かい縁の椅子に凭りかかる。小枝の先に散残つた枯れ枯れの紅葉が眼に見えぬ風にふるへ、時に蠅のやうな小さい蟲が、小春の日光を浴びて、垣根の日陰を斜に閃く。眩しくなつた眼を室内へ移して鴨居を見ると、ここには初冬の森の繪の額が薄ら寒く懸つて居る。

* Cobalt.
青色の一種。

中景の右の方は檜か何かの森で、灰色をした逞しい大きな幹は、^{（青）}並んで、次第に暗い奥の方へ續く。隙間もない茂りの緑は霜にやや寂びて、得も言はれぬ色彩が梢から梢へと柔かに移り變つて居る。ユバルトの空には玉子色に綿雲が流れて、遠景の廣野の果の丘陵に紫の影を落す。森のはづれから近景へかけて、石ころの多い小徑がうねつて出る處を、橙色の服を着た豆大の人が、長い棒を杖にして、前の五六頭の羊を追うて、とぼとぼ出て来る。近景には低い灌木が處處茂つて、中には箒の様な枝に枯葉が僅にくつつ着いて居るのもある。あちらこちらに切倒された大木の下から、眞青な羊齒の鋸葉（コウモリ）が覗いて居る。

寧ろ平凡な畫題で、作者もわからぬが、自分はこの繪を見る毎に、靜な田舎の空氣が畫面から流れ出て、森の香が漂ひ、鶉の叫が聞えるやうな氣がする。その外にもまだ何か知らず胸に響く様な鋭い感情の湧いて來るのを覺える。

二十年前の我が家のすぐ隣は叔父の屋敷、從兄の信さんの宅で、裏の竹藪の中の小徑を通れば我が家と往來が出來た。垣の向うから熟柿（カキ）が覗けば、此方から烏瓜（ウリ）が笑ふ。藪の中に一本大きな赤椿があつて、鶉の渡る頃は、落散る花を筐の枝に貫いて、戰遊びの陣屋を飾つた。木の上には「ご」を仕掛け、鶉を捕つた事もある。

叔父の家は富んで、奥座敷などは二十疊餘もあつたらう。

美しい毛氈が不斷に敷いてあつて、欄間に木彫の龍の眼が光つて居た。

いつか信さんの部屋へ遊びに行つた時、見馴れぬ繪の額が懸つてゐた。何だと聞いたら、油畫だと答へた。その頃、田舎では油繪の石版刷は珍しかつたので、西洋畫と言へば學校の臨畫帖より外には見たことのない眼に、始めてこの油繪を見た時の愉快な感じは忘れられぬ。畫は田舎の風景で、緩かな流の岸に水車小屋があつて、柳のやうな木の下に、白い頭巾をかぶつた女が家鴨に餌をやつて居る。何處で買つたか。と聞いたら、町の新店に、こんな繪や、もつと大きな美しいのが澤山に來て居る。ナポレオンの戦争の繪もあつて、それ

も欲しかつた。との事である。

家へ歸つて夕飯の膳についても、繪の事が心を離れぬ。黄昏時に、袖無を羽織つて、母と裏の藪で寒竹筍を抜きながら、繪のことを思つて居た。薄暗いランプの光で筍の皮を剥きながらも、美しい繪を思ひ浮べて、淋しい母の横顔を見て居たら、急に心細いやうな氣が胸に湧上り、睫毛に涙がにじんだ。何故泣くの。と母に聞かれてなほ悲しかつた。そんなに欲しいなら買つて上げます。男の癖にそんなことでは。と諭されて、更にしやくり上げた。母は蟲壓への藥を取出して吞ませてくれたが、あの時の自分の心は今でも説明は出來ぬ。幼くて母親の手一つに育てられ、餘り豊かでない生活が

朧げに胸にしみ、それに晩秋の木枯さへ既に周圍に迫つて居たから、何かの刺戟は直に譯の分らぬ悲しみを誘うたと見える。

繪を買ふことを許されて翌日、學校へ行つたが、歸りに買ふべき繪の事に心を奪はれ、教場で先生に何か聞かれても耳にも這入らぬ事さへあつた。放課のベルを待ちかねて學校を飛びだし、信さんに教へられた新店を尋ねたら、すぐ知れた。店へ這入ると、一面に吊した繪のニスの香に酔うてしまふ。あれも好い、これも氣に入つた。鍛冶屋の煙突から噴出る眞赤な焰が黒い樹に映えて、遠い森の上に青い月が出て居る繪も欲しかつたが、如何にも靜な穩かな此の森の繪に

きめた。額縁にはめて貰つて、その上を大事に新聞で包んで店を出た時は、心臓が高い音を立てて踊つて居た。

歸途に舊城の後を通つた。お城の杉の梢は丁度この繪と同じ様なさびた色をして、壕の石崖の上には、葉を振ひ落した椋の大木が、枯菰の中の冷たい水に影を落して居る。壕に隣つた牧舎の柵の中には親牛と子牛とが四五頭、愉快さうにさまようてゐる。自分も何となしに嬉しくなつて、口笛をびゆうびゆうと鳴らしながら、飛ぶやうにして歸つた。

森の繪が引きだす記憶は際限がない。堅一尺横一尺五寸の粗末な額縁の中には、あらゆる幼時の美しい幻が疊み込まれて居る。又折にふれては、その幻が畫面に浮び出る。現世

の故郷は移り變つても、繪の中に寫る二十年の昔はさながらに美しい。外の記憶が薄れて來れば來るほど、森の繪の記憶は鮮明になつて來る。

他郷に漂浪しても、この繪だけは捨てずに持つて來た。額縁も古ぼけ、紙も大分煤けたやうだが、森の繪は、繪の有つ情味は、何時でも新しい。(吉村冬彦―藪柑子集)

二一 繪畫の感化

下總國の古河驛に、その氏は忘れしが、茂足といふ歌人ありき。その人、二十年許の昔、陸奥に來りて物語せし事ありしを、今思ひ出でたれば、書きつづりて人人に見せ參らせん。

茂足、若き時、京へ上るに、近江の石部と水口との間に、萬里小路マンリコウジ藤房卿古跡と彫りし碑あるを見しかば、その跡のゆかしさに、尋ね入りて見るに、觀音寺といふ寺ありて、そこに卿の念じ給ひしといふ觀音を安置せり。

その御佛の御前に、われより先に旅商人と覺しき五十餘歳の男入り來りて、何事を歎くにか、さめざめと泣きぬたり。うちつけにその故を問ふべくもあらねば、立去りて本の驛路に出でぬ。頃しも月の二月きさらぎの初なりければ、日影あたたかなるところ見出でて憩ひ居たるに、かの男も出て來ぬ。茂足は、「日影も暖かなり、ちと休み給はずや」といふに、かの男會釋して、同じ所に腰うちかけたり。しばし四方山の物語して、さ

て後に「さきには観音寺にて見かけ参らせしが、かの卿には深き御由縁などおはしますにや」と問ふに、恥ぢらひたる氣色にて、「さては世に似ぬ歎せしをや見給ひけん。賤しき身のいかてやんごとなき御方に由縁などいふことの候べき。但し今日しも不圖思ひ出でしことありて涙せきあへざりけるを、恥しくも怪しまれ候ひけん。懺悔には罪も滅ぶと承れば、若き時の罪ほろぼしに、道すがら語り聞えん」とて、諸共に立出てぬ。

この男は津の國大阪の人にて、幼かりし時に父母を喪ひ、高麗橋あたりの商人の家に奉公してありけるが、その家の子は遊蕩に耽りて、家繼がすべくもあらぬ様なりしかば、父は怒りて勘當しけれども、母は一人の男子ゆゑ、流石にいとしがりき。上總の東金に出店あれば、そこを守る人に竊に頼みてんとは思ひよりしかど、遙けき旅路を獨り遣らんも心もとなくて、この男召出でて、「おことは御兩親ともに世にまさねば、何處に住むとも心安からん。後には必ず家分けて得さすべし。しばしが程、わが子に具して上總の方に行きてよ」とて、金二十兩預けられたり。さてその子と共に大阪を出てたれども、若き人の習にて、勘當受けし身のなほ過を悔いもせず、夜毎に酒色を廢めざれば、中山道の蔭驛かげいせきに來りし頃は、その金も残少なになりたり。

明日江戸より船出せば、東金に渡らん事も難からじなど

*武藏國北足立郡
にあり。

聞くにつけて、行末の事を思ひ續くるに、かかるたのもしげなき人に具して、出店に行きたらんには、假令、母刀自の書ありとて、同じむれのえせ者とや思はれん。よしさは思はれずとも、この人の心なほらぬ程は大阪にもえ歸るまじ。とにもかくにも、よしなき人に伴なひて遙にも來にけりと、悔しき限なかりしが、又思ふやう、身を立て、よすがが求めんには、江戸にまさる所やはある、ここまで來しこそ幸なれ、今宵の中にこの人を棄てて奔らばやと思ひしかど、しばしの程も貯なくてはいかがはせん。かくと知りなば、預かりし金ある内にとにもかくにもすべかりしを、後れにけりと、又更に悔しがりけるが、この人の脇差は、その父の物好きより、百兩餘のつ

ひえもて造りたる物なることを思ひ出でて、よしよし、これを盗みて賣代となさんには、十日二十日の日を送るに難き事はよもあるまじと、心一つに謀りすまして、さらぬさまにもてなしつづ、今宵かぎりの旅寝なれば、などいひ拵へて、酒勧めて寢させつ。

夜ふけて後に、そと起出で、枕邊に忍びよりて窺へば、建てまはしたる屏風の内に、鼾の聲のみ聞えたり。時こそよければ、徐に屏風に手を懸けて引きあくるに、内より行燈の火影のさとさし出でて、後の襖障子に映りたるを、人や來ると驚きて顧みれば、今までは見も入れざりしその襖に、藤房卿の笠置より後醍醐天皇の御供して、大和の方に落ち給ふとき、

*山城國相樂郡。

松蔭に袖しきて、その上に帝を寢させ奉りし形をなん畫きたりける。この男これを見て、あなあさまし、やんごとなき御方だに、君の御爲には、かかる習はぬ憂きめをも見給ふものを、いかなれば、われは主の物盜まんとまで思ひなりにけんと、悔しくも淺ましく覺えて、いねたる人の枕邊に額づき、繰返し繰返し、その過をうちわびたりき。

かくて東金に到りて後も、憂き事あればこの夜の事を思ひ出でて、六年・七年過ぎたりしに、その人も心改まり、家に歸りて父の跡を繼ぎしかば、われも約束の如く家分けて與へられたり。それより次第に仕合せ好くて、今は家業も子に任せて、あかぬ事なき身にはなりにたれど、さてのみ居らんも

うしろめたさに、折折はこころあたりまで物をあきなひにまゐるなり。さればいつとてもこの御寺には詣てぬれど、今日しも不圖思ひ出づれば、若しその折しもこの卿の御姿を見まゐらせずば、いかでかく事なくて世にはあり經べきと、かたじけなさに涙はふり落ちて、君にも怪しまれ候ひぬ。われは賤しき生れながら、若き時より軍物語の書讀むことを好みければ、その時しもこの卿の事を思ひ出でて、まさなき心を改めぬ。よりて子供等にも、物讀むことは常に嚴しく掟て侍り。」と語りけりとぞ。

茂足はその頃四十歳ばかりの人なりき。(那珂通高)

一一一 桔梗ヶ原上

畑の玉蜀黍の穂が出て、薄紫の豆の花が葉蔭にほのめいて来た。山山にかかる朝靄が次第に濃くなつて、やがて曇日となり、風が冷たくなる。中央信濃の高原には既に秋意が浮動して来た。

草原の中にはまだ百合の花が咲いてゐるのに、萩、桔梗も咲亂れ、薄の穂も靡き、蟲の聲が喧しく聞え出した。雲間を渡る日影のきらめきに野は一時にばつと明るく、眞晝頃は草いきれがして、小徑を通るさへ苦しいが、薄日に曇ると、草の葉先の揺ぐのにも何か秋らしい氣分が籠つてゐるやうで、寂しさを覚える。

まだ八月の上旬、都は炎熱に惱まされてゐる頃、この信濃の高原には秋氣が動きそめてゐる。夕暮、汽車に乗つて、松本から次第に桔梗ヶ原へ登つて来る。桑畑の遠く續いてゐる涯を劃して、黒色に聳えてゐる四方の山山、落日の後の餘光が其等の頂を照して、上なる雲に反射してゐる。紅と黄とに燃えてゐる雲から上は、青黒い色が半天を包んでゐる。

東の空は垂れて、水色に澄み、鉢伏山の頂にかかつてゐる。桑の葉を風の渡るのが涼しい。桑畑の中に立つてゐる白壁の家は懐しさを感じさせる。この原の中に設けてある停車場は村井と鹽尻とである。村井を出て汽車は暫く桑畑の間を走るが、やがて九里陵といふ小丘の上へ登る。松林が蜿蜒

として、原の中央を東から西に横断してゐる。この九里陵へ登ると、一層高原の趣が深くなる。落葉松の林、松の林、雜木林が点在して、その間間に秋草が一面に咲満ちてゐる。林と草原との中に粟畑があり、麻畑があり、豆畑があり、大根畑がある。そして周圍の村から移住して來た人人の家が、其處に一群、此處に一群、原上の燈火の影も懐しく建つてゐる。

夕暮かけて遠野の緑の鮮かな事、次第に高まつて、松林が濃く、やがて草山となる東の峯の一帶のたたずまひは、西山の暗緑なるに對して、柔かな若若しい色を浮べてゐる。丁度乙女峠を下つて、箱根山中の高原、千石原に立つた時と同様な、清爽な透徹した感じが胸に沁渡る。

* 御殿場より箱根に越ゆる峠。

* Pocket.

この原の中には葡萄園がある。桃林がある。葡萄園は開いて間もないが、中中廣い。高原地の事として、風透しが悪いので、蟲が付く。葡萄につく蟲は、黄金蟲と、蔓に食ひ込む裸蟲とである。葡萄園には此等の蟲を食はせるために必ず雞が飼つてある。そして雞の番をするために犬が養つてある。犬は野良猫を防ぐと共に、空から襲うて來る鷺を防ぐ用を兼ねてゐるのだ。

桃の實はもう顆顆紅を帯びて、枝もたわわになつてゐる。白銅一個を投じ給へ、ポケット一ぱい、更に兩手に餘つて持ちきれない程の桃の實を得るに違ない。葡萄は廣葉のまま紫玉を盛つて、小さい手籠で賣つてゐるが、又美しい酒に

も醸して賣る。

鐵路も通ぜず、葡萄園も出来なかつた頃には、秋草が枯れて離離として夕風に亂れ、冬は雪が深く一面に降埋めて、只その上を鳥が黒く群をなして舞つてゐる時、よく途を失つた旅人があつた。そして、いつ掘つたとも知れない底知らずの井戸が埋れてゐるのに、馬もろともに落ちて死んだと云ふ話なども耳にした事がある。

原の中には處處に小丘があり、小丘の麓を繞つて、桔梗の花が紫の波を湛へて咲いてゐる。此等の丘は、その昔、戦場であつた頃、死者を葬つた墓であらうか。桔梗は、林の周圍や丘の麓、若しくは少し低くなつたやうな處には、殊に多くの花

を集めて咲いてゐる。

桔梗ヶ原、名前が既に優美ではないか。紫の大輪なのがばつと夢から醒めた子供の眼ざしのやうに開いてゐる時、輪となり線となつた紫綬を引廻したやうに咲亂れて居る時、古墳の裾を取りまいて自からなす紫の花輪が星影微かな下に露を受けてかたみに領き合つてゐる時、ここに來て立つて見ると、如何なる心から、如何なる思から、紫の花が盡くこの原を求めて集まつて來たのかと怪しまれる。

一一三 桔梗ヶ原 下

この原の中に一種の珍しい草がある。細長い莖で、柳に似

た葉をつけた草である。薄紫の花が咲いて、秋になつて實がなる。夕方など一人て草原の小徑を通つて行くと、からからといふ音が聞える。如何にも物寂しい。五歩にして聞える、十歩にして猶聞える。薄曇の日、粟畑から立つ渡鳥の群が遠く遠く小さく消えて行くのを見送つて立つてゐる時など、不圖この草の實が莢の中でからからとなるのを耳にすると、何とも言ひ難い寂しさを覚えるのである。

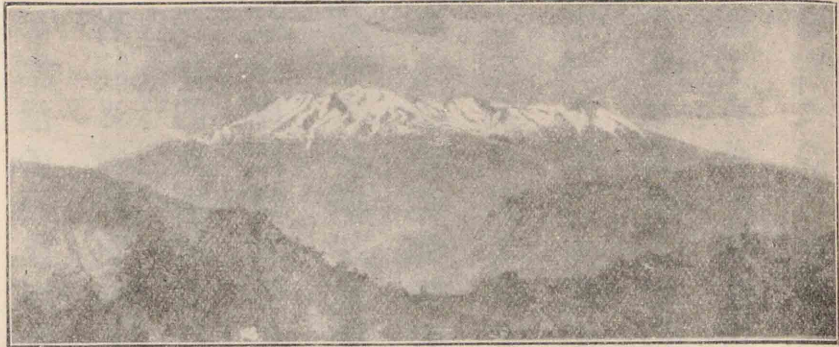
夜更けて、何の響もなく、ただ時時けたたましい聲をして羽音鋭く畑の上を横切つて行く夜鷹があるばかり。それも過ぎた後の静けさ。満天の星は曠野の上に臨んで、銀河が白く流れてゐる時、遠山の姿が黒く野の果に打連なつてゐる

のを見てゐると、つい近くの草原で、からからと此の草の鳴るのを耳にするであらう。微妙な、そして寂しい自然の樂の音である。曠野の寂しさの中心が、その細い一莖の草の中に潜んでゐるやうな氣がする。

今は粟の葉の茂つてゐる上に、五六月頃は麥が青青と伸びてゐる。旅人の笠がその中を浮き沈みしてゐるはてに、松本の城下が見え、五層の天主閣が眺められる。冬の間はいづこにか潜んでゐる小鳥が、つきつきに出て來て、雲雀は麥畑の中や、藪蔭に巢を營む。翁草は其の巢を縁どつて、藤たげな可愛い花を飾つて、巢の中の雛を慰める。今此等の草原の上を日毎通つてゐる者は、近村の桑摘の男女と、白衣の御嶽道

者としてある。

八月の初旬は、桔梗ヶ原の近郊は夏蠶の上簇に近く、最も繁忙な時である。村村の人人は鉢盛山の頂にかかる一片の雲にさへ心を痛めてゐる。この頃の天候は養蠶家が最も心を用ふる所である。籠を背負つて行く者や、車を挽いて行く者や、日に照され、桑の香に蒸され、汗にまみれ、桑摘に餘念もない。いざ夕立雲が西の峯に顯れたと見ると、暑さも苦しさも忘れて、彼等は両手に桑の葉をむしりこき、籠につめ、車に積んで家路に急ぐ。紫電一閃、彼等の後から黒雲は追掛けるやうに曠野を覆うて、野は忽に白雨亂射、土煙が騰り、草が伏し、四邊は雲霧につつまれて、遠近が見分け難い。



木曾の御嶽山

暫時にして此の驟雨が止んだかと思ふと、草の中の途を白衣の道者達がちりんちりと鈴を鳴らしながら、鮮かな日に照されて通つて行く。彼等が向ふところは木曾の御嶽山である。遠い遠い幾十百里の處から、彼等は講を組んで、毎年毎年、夏から秋の初へかけて、木曾の御山を目當に集まつて來る。小さな藍色の旗、同じ揃ひの檜笠、同じ白衣を着け、金剛杖を振つて、彼等は野をも山をも河をも越えて、旅路遙遙こ

の信濃の國まで辿り來るのである。原を横切つて行先は鳥居峠、その峠を越えると木曾路、二日の後には、彼等が長い間の目的地、御嶽山の靈場へ達することが出来るのである。桔梗ヶ原には、日としてこの白衣姿の道者を見、その鈴の音を聞かない事はない。

もうその道者の鈴の音にも、何となく秋の響がこもるやうに思はれて來た。赤蜻蛉が一つ二つ道者達の通る途の上を飛んでゐる。空では、雲のゆききが怪しく、不意に日影が雲に包まれると、山の色まで急に物淋しくなつて、その山の頂近く青色の空が窺はれ、空を劃する絶頂の外郭線が判然と見え、その上を何人とも知らないが、懐しい人が遠く越えて

行つて了つたかのやうな、殘惜しい感じが胸の中に起つて來る。もう夏が逝くのではあるまいか。

中央信濃の高原、もう宵毎の電の光が薄れて、朝曇の空がやがて寂しい雨となり、周圍を繞る山山に雲が低く垂れて、わびしい雨がなかなか霽れさうにもない。恐らく此の雨の霽渡る頃は、山の形が一層明かに浮び、空には白雲が細くたなびいて、凜然たる秋の氣が天地を領することであらう。

(吉江喬松―若き自然)

二四 讀書

常に良き著述に親しむものは、只獨り居れども寂しきこ

(一) Cicero.
(B.C.106-43)

とを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり。失意にも慰み、不平・憂悶もこれを忘る。書は少年の滋味にして、老年の娛樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰諭とを與ふ。外に出でたる時も邪魔とはならず、家に在れば心を樂しましむ。夜の伴、旅の伴、僻地の伴。と羅馬の名士キケロの言ひたるも同じ心なり。されど斯くの如きは人の讀書より受くる最大の利益にはあらず。

諺に、百聞一見に如かずといへるは、何事もその身親しく經驗するに如かずといふ意味なれど、人の壽命は限あれば、七十・八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽く事は幾何もあるべからず。我が日本國內の山水・風俗だけにては、一生には

(二) Lambique. (葡)
蒸溜器。

觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大いなるを思ひ、時の窮まりなきを思へば、人間一身の經驗の狭く、淺く、小さく、且つ少かるべきは言ふにも及ばぬ事なり。さればこそ、今も昔も苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人人は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て、之に親しまん事を願ふなれ。所謂名著は、人間世界開けて此のかた、凡そ三千年間に出でたる大賢・高德・碩學・大才の經驗・觀察・思索・想像をその儘に、又はランピキにかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡等に譬ふるも可なり。もとより人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微なる物をも、遠く且つ

(一) Petrarca.
(1304-1374)

大いなるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして、良書の助を借ることなく、只その貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も、僅に一斑を窺ふに過ぎざるべく、その一斑さへも、正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに書は知識の寶庫にして、かねて智を研ぐ砥石なり。併しながら讀書の用は尙これに盡きたるにあらず。

(二) Channing.
(1780-1842)

伊太利の詩人ペトラルカは曰く、「予に良友あり。彼等は皆名士・大家にして、何れも偉業を成したる者なり。予若しその助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る。」と。これ良書が常にその讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、獎勵する力あるを言へるなり。北米の名士チャニングも曰く、「吾人が傑出

(三) Milton.
(1608-1674)

せる心と相語ることを得るは、主として書籍の媒介に因る。而して斯かる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑吾人に對ひて語り、その最も貴き思想を吾人に與へ、且つその心靈を吾人の爲に吐露す。」と。英國の詩人ミルトンもまた曰く、「良書は保存踏襲して後世に傳へられたる、俊傑が貴重なる生血なり。」と。

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大いなるに驚き、或は品性の高きに感じ、「嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なること斯くの如きものあるか。」と歎ずるなり。若し假初にもその偉大なるもの、優美なるもの、清淨なるもの、崇高なるものに私淑し、之に

をわが心にとりこむこと

傲はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書
用極まれるに近しといふべし。(坪内逍遙—中學修身訓)

二五 競争と科學上

この頃は世界の平和といふことが盛に唱へられる。世界
大戦の惨害を目のあたりに見た者が、戦争の絶無な平和の
世界を希望し、之に憧憬するのは決して無理ではない。併し
今日までの歴史に鑑み、又現在の状態を観察すると、絶対的
平和の時代が人類生活に來るとは思はれない。生活は戦争
なり。と昔の人の説いた通り、凡そ生きて居る以上は何等か
の形に於ける戦は避けられぬ。而して多くの異なつた民族

* Life is war. *Life is war*
第十七世紀の
英國の哲學者
ホッブズスの語。
ホッブズスの語

と民族とが對立して、各自の發展に努めると、その間に利害
の衝突あるも亦免れ得ないのは明白である。

甲の膨脹が乙の存在を危地に陥れるとか、丙の發展が丁
の進路を塞ぐとかいふ場合には、到底その儘には濟まず、談
判に談判を重ねても遂に纏まらぬ上は、何と言つても戦争
の外に方法はなくなる。されば何れの民族でも、一方には熱
心に平和を希望し、力を盡して戦争を避ける手段を講じな
がら、それと同時にまた萬一の場合を慮つて、軍備を充實す
ることを決して怠らぬ。假令戦ふには至らないまでも、隣の
民族からの無理な要求を拒絶するには、常に相當の軍備の
あることが是非とも必要である。

今の世の中で、戦争を始めるには非常な決心を要する故、容易な事では砲火を交へる迄には至らぬであらうが、その間にも民族の競争は決して休んでは居ない。平和の時代には、また所謂「平和の戦争」が盛であつて、之に敗れた民族は實に悲惨な状態に陥らねばならぬ。平和の戦争とは即ち世界の市場を相手とする殖産工業の競争であつて、この競争に於ては優良品を安く賣出す者が勝利を占めるのは無論である。交通の開けなかつた昔の時代には、各民族は自分の入用な物を自分で造つて、他とは關係なしに生活することが出来たが、文明が進み、運輸が便利になつて、世界の隅隅までが隣同士の如くになつた今日に於ては、鎖國は到底不可能

である。他民族と貿易する以上は、否でも應でも、平和の戦争に加はらねばならぬ。かくして戦争の有無に拘らず、民族間に競争の絶えることはないが、この競争に勝つか負けるかは、主として科學の進歩如何によつて定まるのである。

最近の世界大戦の如きは、既に殆ど科學の戦争とも言ふべきであつたが、今後の戦争では更に科學の應用が盛になつて、その勝敗は科學應用の最後の僅少な優劣によつて定まることであらうと思はれる。終局の勝敗は種種複雑な理由によつて決するのは無論で、一概には論斷せられぬが、他の事情が大體同様である場合に、一步でも先へ科學の進歩して居る方が必ず勝つべきことは疑がない。飛行機でも、潜

航艇でも、毒瓦斯でも、爆弾でも、敵に優つたものがあれば、無論それだけ勝てる見込が多い。しかも、優良な武器を造ることとは決して一朝一夕に出来る譯ではなく、常常から十分に研究を積み重ねねばならず、そのためには基礎となるべき科學の進歩が何よりも必要である。科學研究に遅れた民族は、何時でも他の新発見や新發明を僅に眞似するに過ぎぬから、何時までも相手より先に進むことが出来ず、永久に彼等の後に跟隨して行くの外はないが、斯くては一朝事あるに臨んで頗る心細い次第である。

假に最新式の武器を外國から輸入したとしても、之が破損した場合には、之と同等か又は同等以上のものを製造し

得るだけの腕前がなければ、完全な修覆は出来ない。また最新の科學知識を應用した器械は、當然精巧を極めたものである故、之を操縱するには、それに準じた高い程度の科學的素養と科學的腦力とを要する。若しも此の點に缺けた者が操縱すれば、飛行機ならば墜落し、潜航艇ならば沈没するのが當然である。されば、今後萬一の場合を思へば、専門科學者の研究が最も大切であると同時に、一般世人の科學的素養の標準を高めることが何より急務である。

二六 競争と科學下

武器を用ひる戦争は如何に激しくても一時的であるが、

(一) Type writer. *Type writer*
印字機。

所謂「平和の戦争」は長く續いて、而も休む時がない。野蠻時代には交通の便が開けなかつたため、各民族は自國で出來た衣服を着て濟ませてゐたが、文明が進み、國際間の關係が密接になるに隨つて、嗜好も次第に變り、新な要求も生じて、他國の産物を輸入せずには一日も暮せぬやうになる。例へば茶の出來ぬ國で茶が日常缺くべからざる飲物となり、羊の飼へぬ國で誰も彼もが毛絲製の物を着るやうになるが、輸入を要するのは必ずしも斯様な簡單な物ばかりではない。文明が進めば人間の生活が複雑になつて、日日に入用な品物も多くは精巧な細工を施した人造品である。用談には電話機を用ひ、外出には自動車に乗り、手紙はタイプライター

(三) Piano. (二) Sewing-machine.
(四) Phonograph. 裁縫機械。
(五) Kinetoscope.

て書き、着物はミシンで縫ふといふやうに、何をすることも機械が入用であるが、此等の機械を製造し得ぬ民族は悉く之を他から輸入せねばならぬ。單に娛樂のためにもピアノ、蓄音機、活動寫眞機などを要する。

斯くの如く、文明人の生活には機械は附物であり、必需品であるから、誰も之を使はずに濟ます譯に行かぬ。文明の進むにつれ、その需要は益殖える一方である。而も精巧な機械を造るには考案者のみならず、實際に手を下して之を製造する職工までが、科學的頭腦を備へて居なければならぬ。若しも職工の頭が低級であれば、形だけは巧妙に眞似ても、用ひて見ると全く役に立たぬやうな、似て非なる物を造るで

あらう。されば世間一般の科學的素養の低い國では、天産物をその儘で安く輸出して、加工品を外國から高く輸入せねばならず、それでは經濟が成立たない。特に面積狭く天産物に乏しい國では、斯様な状態が長く續いては、須臾にして破産するの外はない。輸出と輸入との平均を保つてゆくには、是非とも他國に劣らぬ立派な品物を製造して、世界の市場に持出さねばならぬが、それには、一人一人の職工までが相當に優れた科學的頭腦を持つまでに、一般の水準を高める必要がある。

科學の進んだ民族は、製造の方法を巧に工夫して優良品を安く賣出し得る。之に反し、科學の幼稚な民族は、腕が足らぬ上に、製造に無駄な手間が多いので、拙悪な品を高く賣らねば引合はぬので、同時に市場に現れた場合、何れが競争に勝つかは態論ずるには及ばない。

以上、吾人は單に物質方面に於ける科學の必要に就て、僅にその一端を述べたに過ぎぬが、科學の効用は決してその方面に限る譯ではない。科學的に考へ得る頭腦を有するとは思想方面にも頗る有効であつて、他の民族に負けぬためには、この方面を大いに奨励せねばならぬ。武器や其の他の製造工業の方に直接應用されるのは、主として物理學と化學とであるから、之のみが必要なものの如くに考へる人もあるが、如何に巧妙に出來た人造品でも、無論天然物に加

工したものに他ならぬ故、材料を研究するには動物、植物、礦物の學問を等閑視してはならぬ。併し此等は思想の方面には餘り直接な影響は及ぼさぬ。思想發達の上に大關係を有するものは生物學である。

今日の社會制度は昔からの引續で、隨分不合理と考へられる部分もあり、強ひて保存しようとする努めると、却て破滅を早める心配がないとも限らぬから、時期を見計らつて徐に改めて行く必要がある。生物學上の知識が國民一般に行渡つて、思想の根柢を造るやうになれば、頑冥な舊思想を何處までも守ることは不可能となり、不合理な制度も一つづつ改良されるに至るであらう。

右に述べた通り、民族發展のためには科學の進歩が何よりも大切であるが、この事は如何なる民族でも同じ程度に行はれ得べきや否やと尋ねると、之は無造作に「然り」とは答へられない。猿には如何に骨折つて仕込んでも、猿だけの藝より出來ぬが如く、各民族にはそれぞれ科學能力の程度に差違があつて、盛に科學の進歩する民族もあれば、幾ら奨励しても或程度以上には到底進めぬのもあらう。例へば黒人が俄に進歩して、科學の研究に於て白人を凌ぐやうに成らうとは到底考へられぬ。自己の民族の將來を思へば、科學は何處までも奨励してその進歩を圖らねばならず、また研究すれば研究しただけの効果は必ず擧るに相違ないが、民族

としての天分以上のことは到底出来まい。

科學が進まねば他の民族に負けることは明白である故、科學は能ふかぎり進めねばならぬけれども、或民族は全力を盡しても、此の點で他の民族に到底かなはぬといふこともあらう。斯様な場合には、民族そのものを改良するといふことも考へねばならぬ。

ともあれ、人の世に競争の存續する限り、その競争場裡に立つ吾吾は、人事を盡して天命を待つの外はないので、吾人は茲に科學研究の一日も忽諸に付すべからざることを痛感するのである。(丘淺次郎の文に據る)

二七 高田屋嘉兵衛

(一四三九一—四六七)
渡島國福山町の舊稱。

(二) 名は守重、正齋と號す。

(三) 名はラクスマン。

高田屋嘉兵衛は淡路の人なり。少くして大志あり、嘗て船戸の傭となる。後、獨立して事を爲さんと欲し、諸弟を將ゐて去つて兵庫に行き、拮据産を治め、更に巨船を造つて松前に轉漕し、家資漸く饒かなり。

寛政十二年、幕吏近藤重藏に従ひ、難を冒して擇捉に航し、同島拓殖の基礎を定む。幕府その功績を嘉し、公廩を給し、且つ官船を領せしむ。ここに於て、北海の濱到るところ高田屋の帆影を認めざることなきに至りぬ。

これより先、寛政三年、露使松前に來りて互市を請ふ。幕府これに答へしめて曰く、通商の一事は祖法あり。今俄に決す

(-) Alexander.
(Aleksandr I.)
(1777-1825)

(二) Rssanoff.



高田屋嘉兵衛

る能はず。と後三十年露帝アレクサンドル一世は、特に侍從
レザーノフを遣して、通好を請はしむ。幕府また前言を反復
するのみ。レザーノフ、自己の
使命を果し得ざるを慚愧し、
憂鬱病を成して死す。當時、レ
ザーノフを載せたる船長某、
深くその死を悼み、彼が爲に
報復を圖らんとせり。

文化六年九月以來、某は無頼漢を率ゐ來りて、屢わが樺太
及び利尻の諸島を暴掠し、且つ書を寄せて曰く、通商を許さ
ずんば、更に大舉して入寇すべし。と警報、幕府に達するや、上

(四) Rikord. (三) Golownin

下震駭してその不慮に備ふ。偶露の海軍中佐ゴロウニン、千
島列島を測量しつつ國後島に至る。戍卒等、僞り迎へて、之を
虜にせり。副長リコルド、變を見て、わが俘者及び漂流民を送
還し、ゴロウニン等を釋さんことを請ふ。戍卒等、また僞りて
「彼は既に誅せられたり。」と告ぐ。リコルド聞きて、更に一邦人
を獲て其の實狀を質さんと欲し、哨艇を派して、船舶の往來
を覗はしむ。

嘉兵衛偶、擇捉より箱館に向はんとして、國後を過ぐ。遙に
岸上を望めば、幕を張り、烽を擧げ、又洋中に一異船を見る。到
れば則ち露艦なり。小銃を亂發して我を攻む。嘉兵衛急に守
備を修むと雖も、事、不意に出で、舟人懾伏して一も指揮に應

ずるものなし。露人乃ち躍つてわが舟に上り、刃を露して嘉兵衛を環り、且つこれを縛せんとす。嘉兵衛これを屏けて曰く、「我は船長なり。」と。露人伴なうて其の本艦に還る。

露艦には大砲十數門を列し、兵士劍戟を手にして、威容森然として殺氣を含む。嘉兵衛昂然として此の間を進み、神色自若たり。リコルド一見して深く之を敬憚し、延いて上座に就かしめ、縷縷言ふ所あり。嘉兵衛よりて、露人が恙なく箱館の獄中に在ることを告ぐ。されど、リコルド未だ信ぜず。嘉兵衛及び水手數人を伴なうて露領の地に到り、後事を商議せんといふ。嘉兵衛毅然として曰く、「善し。水手、何の辜かある。ただ我一人往かんのみ。」と。リコルド聽かず。

* Kamschaka
東部シベリア
の半島。

露艦は嘉兵衛等を拉してカムチャツカ半島に到りぬ。一夜、嘉兵衛リコルドに對ひて、兩國の反目は露人が千島暴掠に因る。今、その事の露國の眞意に非ざるを明かにせば、ゴロウニンの釋放を得べし。」と説けるに、リコルド大いに感じ、翌文化十年五月、嘉兵衛と共にわが國後灣に向ひぬ。國後に着するや、リコルドは水手をして先に往かしめ、厳しく之に囑して、「明早朝、汝等來つて、露人の消息を報ぜよ。然らずんば、余は汝が主を將る去り、來夏、更に數隻の軍艦を伴なひ來りて、之を兵力に決すべし。」といふ。嘉兵衛この狀を見て、意大いに決し、髻を斷ち、副刀を併せて、之を妻兒に遣り、水手等を靡いて去らしめ、更にリコルドを疾視して曰く、「去歲

以來、我、汝と計り、兩國の葛藤を解かんとす。然るに無智の水手に大事を託し、我を艦中に要し、嚇すに豪語を以てす。侮蔑すでに甚し。去歲、わがカムチャッカに赴きしは、汝が武威に懾伏したるに非ず。心竊に期する所ありたればなり。我豈に再び辱を取らんや。と、刀を案じ、膝行して彼に迫る。毛髮盡く、堅ち、目眦皆裂く。リコルド膽落ち氣沮み、恐懼して謝す。嘉兵衛意釋け、汝、心を安んぜよ。事成らずんば、我、亦何の面目あつて、天下に立たんや。と。乃ち岸にのぼりて、北邊の暴掠の露廷の眞意にあらざる事を幕府に陳ず。茲に於てゴロウニン以下皆釋放せられ、二十餘年間、日露の間に横たはりし一抹の暗雲は全く拂ひ去られぬ。惟ふに、北邊、事なきを得たるは、實

に嘉兵衛が功といふべし。

リコルド自ら記して曰く、余、嘉兵衛に對ひて、君もし遺恨を報ぜんとならば、艦内の彈藥庫に放火すべし。艦中のもの、一人として死を免れ得ざらん。と言ひけるに、嘉兵衛冷笑して、否、人の熟睡するを窺ひ、その虚に乗ずるが如きは怯夫の爲すところにして、義勇を尙ぶ日本男兒の敢て爲さざる所なり。と言ひけり。余、その言を聞き、且つ彼が人となりを見て、益、彼の潔白にして豪爽なる氣性に敬服せり。と。

ゴロウニンも亦記して曰く、タカタイカッホーの義俠なる事蹟は、何處にても尊敬せらる。と。嘉兵衛の勇氣と信義とが露人を感服せしめしこと、以て見るべし。

*蜂須賀家。

翌年三月、幕府、その職を復して金を賜ひ、これを褒賞せり。これより、嘉兵衛、家益、富み、業益、昌え、家僕數百人、諸國の港頭には高田屋の旗旆を掲げざる船なく、又その盛名を知らざる者なきに至れり。晩年、郷里に隱退す。阿波侯、嘉兵衛を召し、士班に列せしめ、優游して年を終へしむ。明治四十四年九月、朝廷、その功を嘉し給ひ、從五位を贈らる。(近世人傑傳による)

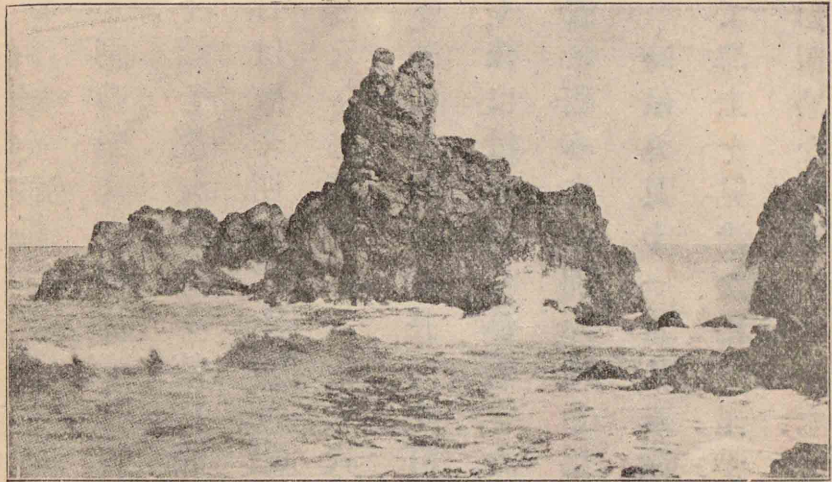
二八 佛濱の月夜

銚子の市街を過ぎて、町はづれなる川口神社の丘に登る。ここは、大利根の海に注ぐ處なり。河の幅いと廣く、對岸には寸馬往き豆人來る。左に銚子の瓦鱗を見渡し、右に鹿島の荒

灘を望み、白帆遠く風を孕み、艫聲近く咿軋として聞ゆ。

祠の後より高原を横ぎりて黒生濱に下り、磯づたひに君ヶ濱を経て犬吠ヶ崎に登り、地藏坂を下りて佛濱に至れば、日ははや西に沈みぬ。此處に旅館あり。曉雞館と云ひ、快哉樓と云ひ、御風館と云ふ。犬吠ヶ崎を左にし、長崎ヶ鼻を右にせる、一曲の海濱の長さ十町ばかりの間、旅館より外には家なく、後には小松おひ續きたる高阜を負ひ、前は直に俯して海波に臨み、自ら別天地を爲せり。曉雞館に投ず。

時は九月十一日、恰も陰曆八月望日に當る。浴後、欄によりて海上を見渡すに、萬里渺として雲なく、暮色やうやう波聲を罩めたれど、日は未だ全く暮れず。犬吠ヶ崎の燈臺も未だ



犬吠ヶ崎海岸

點火せざれば、月の出づるには
 猶程あらんとて、暫く眼を他に
 移ししが、ふと東の方を見れば、
 團團たる明月いつしか海を離
 れたり、離ること數尺、未だ光
 線を放たず、海は碧に、空は青く、
 水天蒼茫の間、月ひとり紅玉を
 懸く。月やうやく上りて漸く小
 となり、波光遠く月に輝きて、萬
 里金沙を散らし、沖に釣する漁
 舟四つ五つ、いとさやかに見ゆ。

白帆金波の中に入りて忽ち見え過ぎてまた消ゆ。月、天に
 冲するに及びて、流光際なく、帆影また隠るる所なし。燈臺の
 火光廻轉する毎に、西に明かに、東に消ゆるは、月光と相闘ひ
 てその光を失へるなり。満潮の刻は過ぎたれども、濤はなほ
 磯に高く、海風は軒近き岸の姫松に颯颯の音をなせども、流
 石に枝上幾百顆の月影をこぼたず、松蟲・鈴蟲・蟋蟀の聲聲も
 殊に秋氣を添へて冷かなり。

起ちて濱邊に下る。巖礁の散布せる邊を、濤と路を争ひつ
 つ、犬吠ヶ崎を後にして、飄然として歩すれば、月はわが顔を
 照し、風はわが袂を翻す。右は松丘自然の屏障を作り、左は大
 洋渺茫としてその際涯を知らず。水陸の間ただ我が身一つ

を點ぜり。顧みれば、旅館影かすかにして、燈光星よりも瘠せたり。(天町桂月―桂月全集)

二九 高瀬舟上

(一) 磐城國白河の城主松平定信。
(二) 京都米山にある淨土宗の本山。

いつの頃であつたか。多分、江戸で白河樂翁公が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつたらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類もないので、舟にも只一人て乗つた。護送を命ぜられて、一緒に舟に乗込んだ同心羽田庄兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。

牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この瘦肉の、色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、庄兵衛をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆はぬやうにしてゐた。而もそれが、罪人の間に往往見受ける様な、温順を装つて權勢に媚びる態度ではない。庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、單に役目の爲に見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の舉動に細かい注意を拂つてゐた。其の日は暮方から風がやんで、空一面を蔽うた薄い雲が、月の輪郭をかすませ、漸う近寄つて來る夏の温かさが、兩岸の土からも、川床の土からも霽になつて立昇る

かと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、四邊がひっそりとして、ただ舳に裂かれる水のささやきを聞くのみである。夜舟で寝る事は罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで黙つてゐる。其の額は晴やかで、目には微かな輝きがある。庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと心の内で繰返してゐる。それは喜助の顔が縦から見ても横から見ても、いかにも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねがなかつたなら、口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまで此の高瀬舟の宰領をした事は幾度だか知れない。併し載せて行く罪人はいつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それに此の男はどうしたのだらう。遊山舟にでも乗つたやうな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其の弟が悪い奴で、それはどんな行掛りになつて殺したにせよ、人情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な悪人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いやいや、それにしては、何一つ辻褄の合はぬ言語や舉動がない。此の男はどうしたのだ

らう。庄兵衛にとつては、喜助の態度が考へれば考へる程わからなくなるのである。暫くして庄兵衛は、こらへ切れなくなつて呼びかけた。

「喜助、お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」と言つてあたりを見廻した喜助は、何事をか役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衛の氣色を窺つた。庄兵衛は自分が突然に問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求める言ひわけをしなくてならぬやうに感じた。そこでかう言つた。

「いや、別に譯があつて聞いたのではない。實はな、俺は先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。俺はこ

れ迄この舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分色々な身の上だつたが、どれもこれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て一緒に舟に乗る親類の者と、夜通し泣くにきまつてゐた。それにお前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。喜助はにっこり笑つた。御深切に仰しやつて下すつて有り難うございます。なる程、島へ往くといふ事は、ほかの人には悲しい事でございませう。その心持は私にも思ひ遣つて見ることが出來ます。併しそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致して參つたやうな苦しみ

はどこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へやつて下さいます。島はよしや辛い所でも、鬼の棲む所ではございませぬ。私はこれ迄何處と云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませぬ。今度お上へ島にゐると仰しやつて下さいます。そのゐると仰しやる所に落着いてゐる事が出来たのが、先づ何よりも有り難い事でございます。それに私は、こんなにかよわい體ではございませぬ。ついで病氣をいたした事はございませぬ。から、島へ往つてから、どんな辛い仕事をしたつて體を痛めるやうな事はあるまいと存じます。それから今度島へお遣り下さるに就きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこ

こに持つてをります。かう言ひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ付けられる者には、鳥目二百文を遣すと云ふのは、當時の掟であつた。喜助は語を續いた。

「お恥しい事を申し上げなくてはなりませぬが、私は今日迄二百文と云ふお足を、かうして懐に入れて持つてゐた事は、ございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きました。それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ、人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物が買へるのは、私の工面の好い時で、大抵は借りた物を返して、後を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、仕事をせず

に食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうてなりません。それにお牢を出る時に、此の二百文戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文は使はずに私が持つてゐる事が出来ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふ事は、私に取つては、これが初でございます。島へ往つて見ます迄はどんな仕事が出来るか分りませんが、私は此の二百文を、島でする仕事の元手にしようと思つてをります。かう言つて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衛は「うん、さうかい」とは言つたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も言ふことが出来ずに、考へて黙つてゐた。

三〇 高瀬舟 下

庄兵衛は彼此初老に手の届く年になつてゐて、もう四人の子供がある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮してある。平生人には吝嗇と言はれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目の爲に着る物の外、寢巻しか拵へぬ位にしてゐる。併し不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が満足する程、手先を引締めて暮して行

く事が出来ない。動もすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が内證で里から金を持つて来て帳尻を合せる。それは夫が借財と云ふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さう云ふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は五節句だと言つては里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと言つては里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を填めて貰つたのに氣付いては、好い顔はしない。格別平和を破るやうな事のない彼の家に、折折風波の起るのは之が原因である。

庄兵衛は、今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右か

ら左へ人手に渡してなくして了ふと言つた。いかにも哀な氣の毒な境涯である。併し一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果して何程の差があるか。自分もお上から貰ふ扶持米を右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有り難がる二百文に相當する貯蓄だに、此方にはないのである。さて桁を違へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持は此方から察して遣る事が出来る。併しいかに桁を違へて考へて見ても不思議なのは、喜助の慾のない事、足る事を知つてゐる事である。喜助は世間で仕事を見付

けるのに苦しんだ。それを見付けさへすれば、骨を惜しまずに働いて、漸う口を糊する事の出来るだけで満足した。そこで牢に這入つてからは、今まで得難かつた食物が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから始めての満足を覺えたのである。庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、ここに彼と我との間に大いなる懸隔のある事を知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折折足らぬ事があるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るに、そこに満足を覺えた事は殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役が御免になつたらどう

しよう、大病にでも罹つたらどうしよう、と云ふ疑懼が潜んでゐて、折折妻が里方から金を取出して来て穴填をした事などがわかると、此の疑懼が意識の闕の上に頭を擡げて來るのである。一體此の懸隔はどうして生じて來るのだらう。只うはべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、此方にはあるからだと言つて了へばそれ迄である。併しそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は只漠然と、人の一生といふ様な事を思つて見た。人は身に病があると、此の病がなかつたらと思ふ。その日そ

の日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又その蓄がもつと多かつたらと思ふ。斯様に先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏止まる事が出来るものやら分らない。それを、今、目の前で踏止まつて見せてくれるのが此の喜助だ。庄兵衛は今更のやうに驚異の眼を見張つて喜助を見た。庄兵衛は此の時空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。(森鷗外—鷗外全集)

新訂新撰國語讀本卷三終

大正十四年一月二十日 訂正發行
 大正十四年一月十七日 訂正印刷
 大正十三年十月二十四日 印刷
 文部省檢定 濟定檢省部文
 中國語科 學校用

大正十三年十月二十四日 印刷
 大正十三年十月二十七日 發行
 大正十四年一月十七日 訂正印刷
 大正十四年一月二十日 訂正發行



定價	臨時定價
卷一、各金四拾壹錢	卷一、各金六拾八錢
卷二、各金參拾七錢	卷二、各金六拾壹錢
卷三、各金參拾參錢	卷三、各金五拾五錢
卷四、各金參拾參錢	卷四、各金五拾五錢
卷五、各金參拾參錢	卷五、各金五拾五錢
卷六、各金參拾參錢	卷六、各金五拾五錢
卷七、各金參拾參錢	卷七、各金五拾五錢
卷八、各金參拾參錢	卷八、各金五拾五錢
卷九、各金參拾參錢	卷九、各金五拾五錢
卷十、各金參拾參錢	卷十、各金五拾五錢

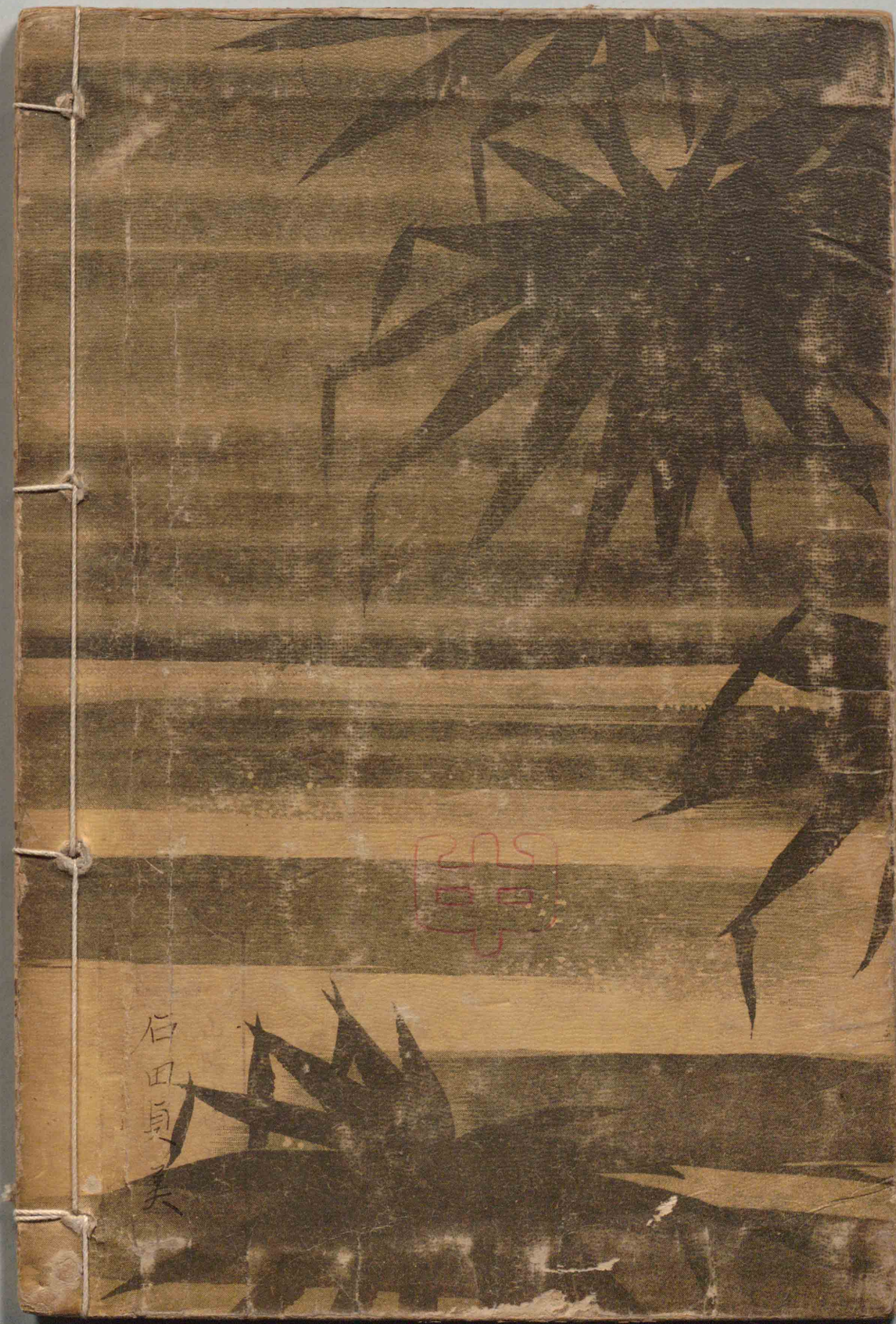
編者 佐々政一
 補修者 大町芳衛
 補修者 武島又次郎
 補修者 杉敏介
 發行所 東京市神田區錦町一丁目十番地
 株式會社 明治書院
 取締役社長 鈴木友三郎

發行所

東京市神田區錦町一丁目
 (振替口座東京四九九二番)

株式會社 明治書院

電話神田(25) 一四一四番



石田貞美

Red square seal with stylized characters